東北歴史博物館中長期目標
後期(平成 30 年度～令和 4 年度)
自己評価

令和５年３月

東北歴史博物館

TOHOKU HISTORY MUSEUM

取り組みの概要

Ⅰ　目　的

平成１１年１０月の開館以来の博物館を取り巻く環境の変化や平成２３年３月に発生した東日本大震災への対応という課題に取り組むため，中長期に取り組む活動方針と達成目標を策定し，平成２５年度からの５年間を前期，平成３０年度からの５年間を後期と位置づけ，より魅力的な博物館を目指して取り組みを推進してきました。

Ⅱ　取り組み項目

魅力的な博物館を実現するため，前期の達成状況と新たな課題を見極めた以下の９つの項目に１６の活動方針と３１の達成目標を設定しました。

重点目標として「″み″たい博物館情報の創造（はくぶつかん情報創造プロジェクト）」と「東日本大震災対応」の２つを柱に据え，関連する個別の達成目標を重点事業に位置付けています。

1　常設展示・企画展示
2　教育普及
3　調査・研究
4　資料の収集と保管・活用
5　情報の発信
6　県民参加
7　施設の整備・管理
8　組織・人員
9　東日本大震災対応

Ⅲ　評価概要

後期５年間の３１の達成目標に対する評価は，各年度で評価された４段階（整数）の評価基準「４：十分達成されている」，「３：ほぼ達成されている」，「２：やや不十分である」，「１：不十分である」の平均値（小数点以下一桁）を「総括評価」とし**２．２～３．８**，その内**３．０を超えた**ものは**２９**。全体をとおした「総合評価」も**３．０**で，各分野で設定した目標に対して「**ほぼ達成されている**」と評価しています。

また，令和２年２月以降は，新型コロナウイルス感染症の影響を受け一部休止等はあったものの，概ね達成目標に対する個別取組が職員のみならず関係者の理解と協力のもと対策と工夫を凝らしながら実施できた事も評価しております。

前期・後期を通じて，成果が上がらなかったものについては，課題を検討し継続して取り組み，成果が上がったものでも維持向上につながるよう視点を変え，新たな課題として取り組むなど，令和５年度からの指標となる「第２期東北歴史博物館中長期目標前期」で取り組んでまいります。

目　次

Ⅰ　取組の概要

Ⅱ　後期自己評価　一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅲ　目標及び自己評価結果

1　常設展示・企画展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

2　教育普及　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

3　調査・研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

4　資料の収集と保管・活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

5　情報の発信　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12

6　県民参加　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16

7　施設の整備・管理　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18

8　組織・人員　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20

9　東日本大震災対応　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21

東北歴史博物館中長期目標達成　後期（平成３０年度～令和４年度）自己評価　一覧

※令和４年度については，令和4年12月末現在での実績・評価

○　後期達成目標の実現に向けて毎年度作成する「目標達成のための個別取組」の実績に対する自己評価を4段階（整数）で評価。
○　後期５カ年総括評価については，平均値（小数点以下一桁）。

※　評価基準　４：十分達成されている　３：ほぼ達成されている　２：やや不十分である　１：不十分である

評価項目		No	担当	後期達成目標	H30	R1	R2	R3	R4	総括評価	備　考
1	常設展示・企画展示	1	企・学	総合展示室のリニューアルを目指し，基本的な構想を策定します。	2	2	2	2	3	2.2	
		2	企	常設展示の充実を図ります。	3	3	3	3	3	3.0	
		3	企	魅力的な展示を実施します。	3	3	3	4	4	3.4	
		4	企	外部の巡回展を積極的に誘致し，幅広い利用者の来館を推進します。	4	3	4	4	4	3.8	
2	教育普及	5	企	各種講座・教室や体験イベントの開催に際し，利用者のニーズや興味関心をつかみながら，質的向上を図り実施します。	3	3	3	3	4	3.2	
		6	企・情	学校利用に対する学習支援の充実を図ります。	3	3	3	3	3	3.0	
3	調査研究	7	学	研究テーマや目的を明確化し，成果を積極的に公開します。	3	3	3	3	3	3.0	
		8	学	総合展示室リニューアルをはじめとする公開や教育普及，博物館運営等，博物館学的な研究をさらに推進します。	3	3	3	3	3	3.0	
		9	学	調査・研究予算確保のため，外部資金の導入を図ります。また，他の博物館や研究機関・団体と連携協力して行う事業を展開します。	3	3	3	3	3	3.0	
4	資料の収集と保管・活用	10	学	研究分野ごとの資料収集方針に基づき，計画的な資料収集を行います。	3	3	3	3	3	3.0	
		11	学	収蔵環境を整備し、より安定的な資料保全を図ります。	3	3	3	3	3	3.0	
		12	学	収蔵資料のデータベースをさらに充実させ，インターネット等を活用して収蔵資料の情報公開を推進します。また，実物資料及び写真資料，図書資料の貸出・閲覧・撮影等にも適切に対応します。	3	3	3	3	3	3.0	
5	情報の発信	13	情	わかりやすいアクセス情報を提供します。	3	3	3	3	4	3.2	
		14	情	多賀城市及び近隣市町との連携を強化します。	3	3	3	3	3	3.0	
		15	情	館のロゴを制定し，館のシンボルとして活用します。	2	3	3	3	3	2.8	
		16	情	来館者の増加につながるような実効力のある効率的な広報を展開します。	3	3	3	3	4	3.2	
		17	情	他館と連携した広報を行うとともに，館内掲示物を充実させます。	3	3	3	3	3	3.0	
		18	情	ホームページを充実します。	3	3	3	3	3	3.0	
		19	情	WEBや電子メールを活用し事業を促進します。	3	3	3	3	3	3.0	
6	県民参加	20	情	来館者のニーズを把握し，そのニーズに対応します。	3	3	3	4	3	3.2	
		21	企	館内ボランティア業務を円滑に運営します。	3	3		3	3	3.0	新型コロナによりR2は評価不能
		22	情・企・学	博物館友の会の活動に対し支援をしながら，自立した会の体制整備に向けて助言，提案をします。	3	3	3	3	3	3.0	
		23	情	大学等学校単位での利用を促進します。	3	3	3	3	4	3.2	
7	施設の整備・管理	24	管	施設設備整備検討委員会で現状を再検証し，障害者や海外の方を含めた全ての来館者の安全と文化財の保全管理に配慮した施設設備を整備します。	2	3	3	3	3	2.8	
		25	情・管	情報システムを更新します。	3	3	3	3	3	3.0	
		26	管	災害時の施設利用・管理について取扱いを整備します。	3	3	3	3	3	3.0	
8	組織・人員	27	管	部班の所管を検証し，必要な見直しを行います。	3	3	3	3	3	3.0	
		28	管	効率的な事業運営が確保されるよう部班間の協力体制の調整を行います。	3	3	3	3	3	3.0	
9	東日本大震災対応	29	学	県立博物館として，県内の文化財の保全活動をリードし，活動全体を推進します。併せて被災文化財の修復や保存に関わる技術的な研究も進めます。	4	3	3	3	3	3.2	
		30	学	災害と復興の歴史及び災害に関する資料の調査・研究を推進します。	3	3	3	3	3	3.0	
		31	学・企	復興祈念事業を展開し，震災から立ち上がろうとする県民の活力増進の一助とします。また，防災教育の拠点として災害展示の公開を目指した整備を進めます。	3	3	3	3	3	3.0	
総合評価		（視点）　〔”み”たい博物館の創造〕〔東日本大震災対応〕 ○観てみたい魅力的な展示　○参加してみたい興味ある講座・教室 ○話してみたい気持ちの良い接遇　○調べてみたい研究報告・論文 ○知ってみたい資料目録の公開　○訪れてみたい安心・安全な博物館 ○すべてのみたいを発信する広報 ○災害に関する調査研究の推進と災害復興に貢献する博物館			3	3	3	3	3	3.0	

東北歴史博物館中長期目標達成　後期（平成３０年度～令和４年度）自己評価

※令和４年度については，令和４年１２月末現在での実績・評価
※「年度」欄の「◎」は後期重点目標，「○」は各年度の重点目標

１　常設展示・企画展示

【活動方針】　(1)　何度も訪れたくなる常設展示を目指します。

【達成目標】　①　総合展示室のリニューアルを目指し，基本的な構想を策定します。

【担当：企画部企画班，学芸部学芸班】
○　「総合展示室リニューアル」については，目標設定時とは当館を取り巻く状況は変化しており，先行事例を調査した結果，展示室のみを更新する目的でリニューアルできた例はほぼないことが判明した。
○　それを受けて，ワーキンググループを組織し，短中期の更新とリニューアルで解決すべき課題とを整理する体制を整え，今後は将来的な施設の大規模改修にあわせて展示をリニューアルできるように課題を整理しながら準備を進め，機器の更新など短期・中期の更新を計画的に進めていく。

年度	実　　績	評価
H30 ◎	○　「歴史的災害展示研究」プロジェクト及び各分野担当者で2016年度に策定した「歴史的災害」を盛り込んだリニューアル基本構想をベースに，災害復興関連の補助金獲得も踏まえて総合展示室全体のリニューアルを検討してきたが，スキームやスケジュール的に難しいとの判断にいたった。今後は，災害展示を要素として盛り込むものの，「歴史的災害研究」とは切り離して総合展示室リニューアルに向けた取り組みを進めていく。 ○　総合展示に盛り込む新たな要素である「歴史的災害」については，その動機となった東日本大震災から10年の節目となる2020年3月にプレ展示会（企画展）の開催を検討している。この企画展は，東日本大震災からの復興向けた当館の10年間の取り組みを総括するものである。 ○　予算編成スケジュールについては，企画部，学芸部と連携しリニューアル計画の進捗を踏まえてすすめていく。総合展示室リニューアルの実現に向けて検討のため，他館の取組みや国庫補助事業に該当するものがないか等の情報収集を行っている。	2
R1 ◎	○　令和4年度（後期最終年度）にリニューアルの基本的な構想を館内で策定するにあたり本年及び来年度はリニューアルの実践例調査を実施してデータの蓄積を図り，その方向性について企画班内でまとめる作業を進めている。調査と並行して，11月には企画班会議を開催し，「歴史的災害」以外のリニューアル要素について協議・検討を行った。「多賀城跡」を中心とした東北古代史ブースの拡充案などが挙っており，今後も定期的に会議を開催して協議・検討を進める。 ○　総合展示に盛り込む新たな要素である「歴史的災害」については，各分野で資料検討を進めており，科研費事業の総括を踏まえた試行展示会を2月26日～3月8日に開催して意見交換を行った。	2
R2 ◎	○　本年度は，神戸市立博物館・旭川市博物館・国立アイヌ民族博物館などの調査を実施してデータの蓄積を図った。各調査では，リニューアルの方向性や，新たなテーマと視点，プロセスなどについて情報を収集し，これらを参考にして，総合展示リニューアルの柱となり得るテーマの検討・協議を進めた。	2
R3 ◎	○　徳島県立博物館や石巻市博物館など近年リニューアル・開館した博物館施設を調査したほか，東北地区博物館実務担当者会議において東北各県の県立博物館とリニューアルについて意見交換し，リニューアルのプロセスや他館の状況について情報収集した。 ○　総合展示室の現状の課題と改善案について，各時代の展示担当を中心に職員に聞き取りを行い，資料，コンセプト，器具など，多角的な視点からの評価をまとめた。	2
R4 ◎	○　常設展示等更新ワーキンググループを組織し，リニューアルの目的と今後予想されるプロセスを確認した。将来的な施設の大規模改修に伴う展示等のリニューアルについて議論・検討した。 ○　常設展示等について，令和３年度にまとめた課題をもとに更新・改善の方向性を議論し，短中期的な更新と大規模改修で解決すべき課題について仕分けした。 ○　年度内の更新作業について検討し，総合展示室演出照明のLED化を進め，雑貨屋のテレビ映像展示の更新などを計画的に実施した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度の評価は「２～３」，５カ年平均「２.２」で全体の中でも低い評価となった。 ○　H30～R3は，取り組みの枠組みが見えず，担当やプロセスが不明確との意見もあり，評価が低かったが，R4は計画性を向上させ，具体的になったと考える。将来の施設全体のリニューアルに向けて課題を整理できた点は評価できる。 ○　第２期中長期目標においては，課題を常に整理，検証しながら，展示の更新と展示替えを実施されたい。	2.2

【達成目標】　②　常設展示の充実を図ります。

【担当：企画部企画班】
○　総合展示室については，展示コンセプトを継承しながら新資料に入れ替えを行って内容を充実させた。
○　テーマ展示については，毎年新しいテーマの展示を実施し，既存の企画の質的向上も行った。
○　利用者が快適に観覧できる環境整備のため，照明のLED化や映像機器の更新した。

年度	実　　績	評価
H30	○　常設展示では文化財課から移管資料等による新たな考古資料の公開を年度末に予定しており，準備を進めている。また，展示資料・キャプション・展示パネル等に関して1月のメンテナンス期間に要改修箇所の更新を行う予定である。 ○　テーマ展示室では，外部資料を含む新資料活用，構成維新等により展示内容の充実を図り，ＷＥＢでの資料紹介も積極的に行うことを目標としている。特別展「伊達綱村」と連動するかたちで，開催する伊達家の資料を扱った新企画「伊達慶邦巡見図録」展(9月19日～10月28日・美術)，「伊達政宗とその周辺」展(10月30日～12月28日・歴史)を開催し，再構成による「色麻古墳群ー県北の大規模群集墳ー」展(7月8日～12月28日・考古)も開催した。他の展示でも積極的に新資料を採用しており，今後も新企画の「東北の土偶」展(2月1日～・考古)等を開催する予定である。また，美術分野における展示では子ども向けリーフ等を配布するなど，よりわかりやすい展示内容となるよう配慮している。 ○　映像展示室では，東北地方の祭りや民俗芸能などの無形文化財の記録を上映している。 ○　金野家住宅では，2019年度の屋根葺き替え工事に伴う公開計画や築250年を記念し関連企画を立案し，実施に向けて予算要求も行っている。 ○　その他，エントランスホールでは海上保安本部主催，当館共催によるパネル展「明治維新と海図」(9/19～9/30)・「灯台150年の歴史」(10/23～10/30)を開催し，愛感謝から好評を得た。「特別展」が終了する12月以降は，ＷＥＢでの資料紹介等を積極的に行い，集客を図りたい。	3
R1 ○	○　総合展示室では，各時代担当で展示内容及び資料の再検討を行い，これを集約した上で，本年度は旧石器～弥生時代について考古資料等の一部入替え(最新の発掘調査資料)及び追加を12月のメンテナンス期間に実施し，展示内容の充実を図った。 ○　テーマ展示室では，新資料の活用及び構成刷新等により展示内容の充実を図った。また，展示室への案内掲示の改良や，ＷＥＢでの展示資料紹介なども積極的に行っている。具体的には，特別展「最新技術でよみがえるシルクロード」と連動するかたちで資料を遺す保存科学の仕事を紹介した新企画「博物館で守られるモノ」展(4/9～8/4・保存科学)，金野家住宅母屋建築250年を記念した新企画「金野家住宅の歴史」展(8/6～12/1・建築)，文化財課から移管資料を用いた新企画「入の沢遺跡」展(3/19～5/6・歴史)，再構成による「宮城の土偶」展(8/6～12/1・考古)等も実施した。他の展示でも積極的に新資料を採用している。また，美術分野における展示では，子ども向けリーフ等を配布するなど，よりわかりやすい展示解説となるよう配慮している。 ○　映像展示室では，東北地方の祭りや民俗芸能などの無形文化財の記録を上映しており本年度は解説シートの統一化を図った。 ○　金野家住宅では，かやぶき屋根の葺き替え工事のため，8月以降の観覧を休止(3月末まで)したが，母屋建築250年を記念したテーマ展や講演会(10/14)，屋根葺き替え工事の現地見学会(2/24予定)等の事業を展開することで，展示への関心と理解を深めている。	3
R2 ○	○　総合展示室では，ニーズ把握のためアンケート調査を企画していたが，新型コロナウイルス感染症の影響により実施できなかった。しかし，来館者の意見をもとに，各時代担当で展示内容及び資料の再検討を継続的に実施しており，これを集約した上，本年度は旧石器時代，弥生時代及び古代について考古資料等の調整(入替えや資料数調整，レイアウト変更など)を12月のメンテナンス期間に実施し，展示内容の充実を図った。 ○　テーマ展示室では，新資料の活用及び構成刷新等により展示内容の充実を図っている。また，展示室への案内掲示の改良や，SNSを活用した展示資料紹介なども積極的に行っている。具体的には，新企画として「鍛冶沢遺跡ー蔵王東麓の再葬墓ー」展（7/7～11/29・考古），「多賀城の高級食器ー緑釉・灰釉・青磁・白磁ー」展（1/5～・考古），「モダンデザインの源流」展（1/5～・考古），再構成や新資料の活用として「郷土玩具の世界ー篠田コレクション・江戸独楽ー」展（9/29～11/29・民俗），「仙台の近世絵画ー東東洋の屏風」展（9/1～10/11・美術），外部資料を活用した企画として「仙台藩の工芸ー刀剣と甲冑ー」展（5/19～7/12・歴史）などを開催もしくは開催予定である。 ○　映像展示室では，東北地方の祭や民俗芸能などの記録映像を上映し，無形文化財への関心と理解を深めている。 ○　今野家住宅では，コロナ禍でボランティアが活動できない状態が続いているが，解説パネルの設置，観覧ルートの設定などの代替策を講じて，展示への関心と理解を深めている。	3
R3	○　過去５年間の一般及び学校団体に行ったアンケートから，常設展示に関する記述と評価について抽出・分析し，来館者ニーズの把握に努めた。 ○　テーマ展示室では，館蔵資料の活用と構成刷新など充実を図った。新企画として，「宮城県の土師器」，「中世のうつわ」を実施した。「染めの型紙」，「仙台藩の工芸-刀剣と甲冑-」，「仙台の近世絵画-仙台四大画家-」では資料の一部を入れ替えて展示し，館蔵資料を活用した。そのほかの展示でも構成と説明を見直すなど工夫して充実を図った。	3
R4	○　令和３年度にまとめた常設展示と施設に関する利用者アンケート等の分析を進め，常設展示と施設に対するニーズと改善への期待について把握した。 ○　テーマ展示について，新企画「新収蔵の近世絵画資料」，「多賀城跡出土漆紙文書」などを実施した。新企画以外のテーマ展示についても資料の入れ替えを行い，館蔵資料の活用推進と展示の充実につなげた。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　常設展示は博物館の中核であり，これを目的とする来館者のさらなる増加に繋がるようさらなる充実図られたい。 ○　第２期中長期目標では，総合展示室の音声ガイドの更新や，テーマ展示の新企画実施などに継続的に取り組まれたい。	3.0

【活動方針】　(2)　利用者の要望をとらえ，時宜を得た魅力的な特別展示を目指します。

【達成目標】　③　魅力的な展示を実施します。

【担当：企画部企画班】
○　来館者の知的好奇心の醸成と観覧者増を目指し，多様なテーマの特別展を各年度３～４本実施した。
○　R2.２からの新型コロナウイルス感染症の影響により，観覧者数では目標に届かない場合が多かった。
○　感染症対策を徹底した上での特別展の実施となったが，アンケート等では観覧者の高い満足度を得られていおり，幅広い利用者の要望に応える魅力的な特別展を開催できたと考える。

年度	実　　績	評価
H30 ◎ ○	○　各展覧会の観覧者数については，「東大寺と東北ー復興を支えた人々の祈りー」展は68,503人，「タイムスリップ！縄文時代」展は8,067人，「伊達綱村」展は4,888人を数えている。 ○　近年の特別展観覧者総数は，2013年度：23,369人，2014年度：39,287人，2015年度：48,403人，2016年度：40,760人，2017年度：60,367人となっている。今年度は，各展覧会で目標とした観覧者数（東大寺展：80,000人，縄文展：8,500人，綱村展：10,000人）を下回っているものの，「東大寺と東北」展は過去２番目の値を示し，観覧者総数では既に昨年，一昨年を大きく上回る81,458人を記録している。 ○　本年度開催した各特別展では，大型共同企画・自主企画ともにより魅力的な展示を目指して以下の取り組みを行った。その結果，各展示の観覧者アンケートでは，高い満足度が得られている。 ○　「東大寺と東北」展は，復興祈念ー東大寺実行委員会を組織して開催した大規模特別展で，充実した展示内容に加えて，これまでにない大規模な広報と関連行事を展開した。 ○　「タイムスリップ！縄文時代」展は，小学校高学年をターゲットにした子ども向け自主企画展で，実物資料にイラストや写真，復元模型などを組み合わせたわかりやすい展示，子どもたちが学びを深めるための体験スペースとツールを要所に組み込んだ展示を展開し，補助金（文化庁地域の美術館・博物館を中核とした文化クラスター形成事業）を得て展示解説書も制作した。また，「縄文植物園」として屋外展示にも取り組んだ。 ○　「伊達綱村」展は，仙台藩四代藩主綱村の没後300年を記念して政治・経済・文化の各方面にわたる事績を顕彰した自主企画展で，寺社との協働により掘り起こした地域資料の活用，地域との深い関わりを特集する展示を試みた。 ○　2019年度特別展については開催準備を進めており，その翌年度の特別展についても開催企画を決定し，準備を開始した。	3
R1 ◎	○　各展覧会の観覧者数については，「最先端技術でよみがえるシルクロードー法隆寺・敦煌莫高窟・バーミヤンー」（スーパークローン文化財）展は23,909人，「モダンデザインが結ぶ暮らしの夢」展は3,381人，「蝦夷ー古代エミシと律令国家ー」展は9,088人を数えている。 ○　今年度は，各特別展で目標とした観覧者数（スーパークローン展：35,000人，モダンデザイン展：8,000人，蝦夷展：11,500人）を下回り，観覧者総数でも36,378人と，近年では低い数値となった。ここ数年と比べて，巡回展の規模が小さかったことも要因の一つに挙げられるが，その分，歳出額も押さえることができた。また，開館20周年を記念した「蝦夷」展では，自主企画としては久しぶりに9,000人を超す観覧者を得ることができた。 【参考】近年の特別展観覧者総数は，2014年度：39,287人，2015年度：48,403人，2016年度：40,760人，2017年度：60,367人，2018年度：81,458人となっている。 ○　本年度開催した各特別展では，巡回・自主企画ともにより魅力的な展示を目指して以下の取組を行った。その結果，各展示の観覧者アンケートでは，高い満足度が得られている。 ○　「スーパークローン文化財」展は，東京藝術大学が企画した復元（複製）品のみで展示を構成する新規性の高い展示で，空間再現の手段として音・香りの展示も試みた。また，スーパークローン文化財の技術面をわかりやすく紹介するキャプション（こどもキャプション）の設置や展示のスポット解説，レプリカづくりのワークショップや缶バッチ企画等，当館独自の取組を行った。広報面では，広報開始時期を早め，SNSの活用等を試みた。 ○　「モダンデザイン」展は，5人のデザイナーに注目してその活動と交流からモダンデザイン史に迫る高崎市美術館企画の巡回展で，工芸指導所や剣持勇といった宮城県ゆかりの資料・人物も扱っている。展示室の仕切りをパネルのみで行うなど空間演出に工夫を凝らし，展示のコンセプトと作品1点を短く解説する「ちょこっと解説」，クロスワードパズル等のワークシート設置によって展示内容の理解を促した。巡回展としては低予算で経費を抑え，若い世代をターゲットとした新たな試みの企画であったが，集客には苦戦した。 ○　「蝦夷」展は，当館の開館20周年を記念した自主企画展で，近年の発掘調査成果及び文献史料研究をもとに蝦夷の実像に迫ろうとするものである。会期前にはプレイベントとしてアニメ「アテルイ」上映会・特別講演会を実施し，会期中は，記念企画として講演会・講座等を毎週末に開催（全13回）し，合計約5,400人（各回260～580人）の参加を得ており，展示テーマに対する関心の高さを示す結果で，展示内容の理解を深め，満足度を高める効果があった。また，広報面ではマスメディアへの働き掛けの強化，多賀城市との連携など新たな取組を試みた。	3
R2 ◎	○　本年度開催した自主企画の特別展は２本で，観覧者数は「みやぎの復興と発掘調査」展が1,528人，「伝わるかたち／伝えるわざ――伝達と変容の日本建築」展が３,９８２人であった。いずれも新型コロナウイルス感染症の影響が甚大で，観覧者数は目標を大きく下回った。なお，「みやぎの復興と発掘調査」展は新型コロナウイルス感染症の影響による休館で公開期間が予定のほぼ半分となり，展示解説を含めた関連企画，アンケート等も全て中止した。 ○　各特別展では，展示資料やパネル等の数量・配置・間隔などに配慮して三密を回避する取り組みを行い，来館者が安心してじっくり観覧できる環境を整えた。 ○　「伝わるかたち／伝えるわざ」展では，より魅力的な展示を目指して出陳する資料の充実や関連企画開催などに取り組んだ。具体的には，「国立博物館収蔵品貸与促進事業」を活用することで法隆寺五重塔模型や増上寺本堂図など貴重な資料の出陳にこぎ着け，展覧会自体の理解を深め，集客に繋がる「起し絵図」や「木組み」のワークショップを開催した。その結果，観覧者アンケートでは，高い満足度が得られた。また，アンケートの動向をみながら図解パネル追加等の対応も行った。	3
R3 ◎	○　武芸が注目されやすい武士と，文芸的な絵画との関係を特集する斬新な切り口で，特別展「みちのく武士が愛した絵画」を実施し，武士の文化面での魅力を伝えた。来館者からは仙台藩主に関わる絵画が見応えがあったという感想が多く，好評を博した（４，０８４人）。 ○　実際に椅子に座れる体験や部屋の再現など，資料から生活がイメージできるように工夫して，特別展「デンマーク・デザイン」を開催し，北欧デザインの魅力をわかりやすく伝えて満足度を高め，好評を博した。 ○　特別展「ジュラシック 大恐竜展」では，コロナ禍であっても感染症対策を十分にすることで，本物の恐竜化石に触れ，ロボットや全身模型で大きさを体感できるように展示した。宮城県ではめったにない大規模の恐竜展で，迫力のある体感できる内容が好評であった。	4
R4 ◎	○　前年度の実績に基づいて改善点を検討し，感染症対策を徹底しながら魅力的な展示の実施に取り組んだ。全国規模の魅力的な巡回展を実施して貴重な資料に触れる機会を提供した。自主企画展は，宮城県と東北にゆかりのあるテーマと資料で構成し，日頃の研究の成果を魅力的な展示として県民に還元した。 【開催した特別展】 春季特別展「知の大冒険　-東洋文庫　名品の煌めき」（巡回展） 夏季特別展「欲望の昭和」（自主企画） 秋季特別展「みちのくのサムライ」（自主企画） 冬季特別展「キングダム　-信-」（巡回展）	4
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度の評価は「３～４」，５カ年平均「３.４」で全体の中でも高い評価となっている。 ○　多様なテーマの展示を実施することで，幅広い観覧者の高い満足度を得ることにつなげることができたと考える。 ○　今後も十分な感染症対策を実施したうえで，魅力的で多彩な特別展の開催に取り組まれたい。	3.4

【達成目標】　④　外部の巡回展を積極的に誘致し，幅広い利用者の来館を推進します。

【担当：企画部企画班】
○　博物館単独では実施困難な全国規模の巡回展について，歴史だけでなく，漫画や海外のデザイン，恐竜など多様で幅広いテーマの巡回展を誘致し，開催した。
○　R2.2からの新型コロナウイルス感染症の影響により観覧者数は落ち込んだものの，今まであまり本館を利用することのなかった，様々な興味関心を持つ幅広い世代の利用を促進できた。
○　今後も，感染症対策を徹底した上で，アンケートで得られた幅広い利用者の要望を分析しながら魅力的な巡回展を誘致・開催していく。

年度	実　　績	評価
H30	○　マスコミ・プロモーター提案あるいは共同企画による大型巡回展等の誘致を継続して積極的に図っている。来年度は，河北新報社からの提案で東京藝術大学・山陰中央新報社が企画した巡回展「最先端技術でよみがえるシルクロード」を河北新報社，東北放送とのタイアップにより春季に開催する予定である。また，高崎市美術館・パナソニック汐留ミュージアムとの共同企画で「モダンデザインが結ぶ暮らしの夢」展を夏季に開催予定している。 それ以降の大規模展覧会の誘致・開催についても現在，多面的な働きかけを行っている最中である。	4
R1	○　マスコミ・プロモーター提案あるいは共同企画による大型巡回展等の誘致を継続して積極的に図っている。来年度夏季には，毎日新聞社から企画提案のあった巡回展「GIGA・MANGAー江戸戯画から近代漫画へー」を河北新報社，東北放送とのタイアップにより開催する予定である。それ以降の大規模展覧会の誘致・開催についても現在，多面的な働きかけを行っている最中である。	3
R2	○　本年度開催した巡回展「GIGA・MANGA　江戸戯画から近代漫画へ」（毎日新聞社企画，河北新報社・東北放送共同主催）の観覧者数は12,899人であった。新型コロナウイルス感染症の影響が大きく，集客面では苦戦したが，関連企画を含めて観覧者の満足度は高く，SNSで話題になったり，情報が拡散する状況もみられた。また，家族連れを中心に20～40代の観覧者が目立ち，若い世代の来館に繋がったことの成果は大きい。 ○　マスコミ・プロモーター提案あるいは共同企画による大型巡回展等の誘致を継続して積極的に図っている。来年度は，春季に河北新報社，仙台放送とのタイアップによる北欧デザインに関心が強い若い世代をメインターゲットとした「デンマーク・デザイン」展，夏季に河北新報社，東日報放送とのタイアップによるこども達を中心に家族連れをメインターゲットとした「ジュラシック・大恐竜」展を開催する予定である。それ以降の大規模展覧会の誘致・開催についても現在，多面的な働きかけを行っている最中である。	4
R3 ○	○　特別展「デンマーク・デザイン」では，北欧デザインに興味・関心のある20代～40代を中心に多くの来場を得た（19,394人）。 ○　特別展「ジュラシック 大恐竜展」では，未就学児や小学校低学年を連れた家族というこれまで利用が少なかった層の来場が多くあった（未就学児含め64,812人）。 ○　巡回展の集客効果で，常設展示と こども歴史館についても幅広い層の利用につなぐことができた。 ○　令和４年度春開催の巡回展として誘致できた「知の大冒険」は，全国最初の巡回館であり，注目度も高く，歴史的に価値のある本を見たい人だけでなく，読書やおしゃれな図書館に行くことを趣味として楽しむ幅広い世代の来館が期待される。 ○　令和４年度冬開催の巡回展として，週刊誌で連載中の大人気歴史漫画の「キングダム」を誘致できた。中国の歴史を好きな人だけでなく，漫画好きな若い世代の来館が期待される。	4
R4 ○	○　外部巡回展を実施し，幅広い利用者の来館を推進した。 【開催した展覧会】 春季特別展「知の大冒険　-東洋文庫　名品の煌めき」 ※歴史が好きな人だけではなく，書物が好きな人，教科書に載っている資料の実物を見たい人など多様な目的をもった利用者の来館を得た。 冬季特別展「キングダム　-信-」 ※作品の読者層である１０代～５０代という幅広い層の来館が得られた。漫画・アニメ・映画が好きな人など，普段当館の利用が少ないと思われる層の来館もあったと考えている。 ○　令和６年度以降開催の巡回展について検討し，誘致に取り組んだ。	4
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度の評価は「３～４」，５カ年平均「３.８」で全体の中で最も高い評価となっている。 ○　R2～４年度は，毎年１～2本の外部巡回展を誘致・実施できており，注目度も高く，コロナ禍の中でも来館者増に繋がり，県民に優品や貴重な作品に触れる機会を提供できたことは評価できる。 ○　第２期中長期目標においても感染症対策を徹底したうえで，積極的に誘致・開催に取り組まれたい。	3.8

２　教育普及

【活動方針】　(1)　多様で親しみやすく，参加したくなる教育普及事業を目指します。

【達成目標】　⑤　各種講座・教室や体験イベントの開催に際し，利用者のニーズや興味関心をつかみながら，質的向上を図り実施します。

【担当：企画部企画班】
○　教育普及事業については，アンケートや参加者動向を分析し，ニーズや興味関心をつかみ，質的向上につなげた。
○　R2.2からの新型コロナウイルス感染症の影響は大きく，規模の縮小や中止せざるを得なかった催事もあったが，感染症対策を徹底しながらほとんどの事業を実施した。
○　電子申請や事前申し込み制等により利用者の利便性の向上に取り組んだ。

年度	実　　績	評価
H30 ◎ ○	○　過去５年間の各種教育普及事業についてデータを整理するとともに，本年度事業についてアンケートを実施し，ニーズの把握と事業改善に取り組んでいる。 ○　体験教室やイベント，多賀城巡り等では，新たなプログラムの導入やプログラム内容の更なる質的向上を図った。 ○　特別展（「東大寺と東北」展・タイムスリップ！縄文時代」展）関連企画として，砂金採り体験・写経体験・体験教室「子ども縄文時代研究」（３回）・体験イベント「縄文時代の道具に挑戦！」（３回）などの教育普及事業を実施した。 ［講座］ ○　館長講座は，館長が長年取り組んできた研究などを紹介する連続講座で，今年度は10回実施し，468名の参加があった。参加者の満足度は高かった。 ○　史料講読講座（３回）は，参加者は156名であった。 ○　古文書講座入門編（３回）は，参加者は169名であった。 ○　その他，古文書講座中級編（４回），れきはく講座（７回），民俗芸能講座（３回）については現在開催中で，多くの参加者を得ている。 ［体験教室］ ○　夏の体験教室では，親しみやすく参加したくなるような教室の展開を目指し「古代のハンコをつくろう」・「鹿角のペンダント作り」・「和とじのオリジナルノートをつくろう」・「縄文人は何を食べたの？」を実施した。後３回は新企画で，毎回定員以上の参加があり，全体として満足度も高かった。 ○　冬の体験教室は，人気の高い「とんぼ玉をつくろう」と新企画の「組紐を作ろう」を実施した。こちらも定員を上回る参加希望があり，参加者の満足度も高かった。 ［体験イベント］ ○　秋の体験イベントを実施し，登録者数470名，プログラム総参加者数1,649名であった。冬も開催予定であり，400～500名の登録者数を目標としている。 ○　体験イベントでは，更なる内容の充実と参加者数の増加を目指し，魅力的な新規プログラムの開発と広報戦略の見直しに取り組んでいる。 ［多賀城巡り］ ○　今年度はハイキング形式の番外編（３回）も含め12回開催し，終了している。計172名（昨年度は14回で計178名）の参加があり，特に番外編の人気が高かった。 ［民話事業］ ○　今野家住宅において，利府民話の会と多賀城民話の会による「民話を聞く会」を６回開催し，計206名の参加者があった。 ○　今野家住宅を活用して小学生に民話語り手体験をしてもらう事業を展開した。事前案内会にあたる「民話にふれよう」（講師と過去の事業体験者が民話を披露）では93名の来場者があり，計４回で構成された体験プログラムには小学生11名の参加があった。このプログラム参加者が覚えた民話を披露する最終回「民話を語ろう」には80名の来場者があった。	3
R1 ◎	○　開館20周年を機に，教育普及事業全体の見直しに着手した。具体的には，11月に企画班会議を開催して各種講座・教室・体験イベント等を総括した上で，来年度以降の事業改革案について協議している。今後も各担当を中心に検討を進め，協議の場を設けながら，利用者のニーズや興味関心により応えられる事業へと改革を進めていく。 ○　個別の事業では，本年度も来場者の動向やアンケート結果等を注視し，ニーズの把握と広報の追加策を講ずるなど事業改善に取り組んだ。 ○　体験教室・イベント・多賀城巡り等では，新たなプログラムの導入やプログラム内容の質的向上を図った。 ［講座］ ○　館長講座は，館長が長年取り組んできた研究などを紹介する連続講座で，今年度は「年中行事と芸能」をテーマに12回実施し，773名（平均64名）の参加があり，参加者の満足度は高かった。 ○　歴史分野の学芸員が担当する史料講読講座（3回）の参加者数は154名，古文書講座入門編(3回)は133名，古文書講座中級編(4回)は223名の参加があった。 ○　民俗分野の学芸員が担当する民俗芸能講座(2回)では62名の参加者得ている(新型コロナウイルス感染症対策により予定していた3回のうち1回中止)。 ○　学芸員の調査研究成果を発表するれきはく講座(5回)では453名の参加を得ている(新型コロナウイルス感染症対策により予定していた8回のうち3回中止)。 ［体験教室］ ○　夏の体験教室では，親しみやすく参加したくなるような教室の展開を目指し「板状土偶を作ろう！」・「ミニはぎとり体験！」・「七夕かざりを作ろう！」・「石帯を作ろう！」・「色ウルシのコースターを作ろう！」・「末期古墳を作ろう！」を実施した（計６回）。すべて新企画で，定員割れする教室もあったが，全体として満足度は高かった（計119名参加）。 ○　冬の体験教室は，「小正月のまゆ玉を作ろう！」・「ミニ屏風を作ろう！」・「トンボ玉を作ろう！」・「むかしのハンコを作ろう！」の計４回を実施し，77名の参加があった。いずれの教室も人気が高く，早い段階で応募が定員に達したものもあった。 ［体験イベント］ ○　春・秋・冬の体験イベントを実施し，春は登録者数507名，プログラム総参加者数2,307名，秋は登録者数50名，プログラム総参加者数92名であった。冬は登録者数444名，プログラム総参加者数1,350名であった。秋のイベントは台風19号の影響で午前中のみの開催となり，参加者数は少なかったが，新企画もあったことで参加者の満足度は高かった。春・冬は例年並みの参加者数で，冬も新企画を導入している。 ○　体験イベントでは，更なる内容の充実と参加者数の増加を目指し，魅力的な新規プログラムの開発と参加者アンケートの分析から広報戦略の見直しに取り組む。 ［多賀城巡り］ ○　今年度はハイキング形式の番外編（3回）も含め15回開催し，計111名の参加があった。番外編の人気は高かったが，通常編では猛暑の影響で夏季の参加者が極端に減少し，事業形態の見直しを検討している。 ［民話事業］ ○　利府民話の会と多賀城民話の会による「民話を聞く会」を3回開催し，計204名の参加者があった。 ○　小学生に民話語り手体験をしてもらう事業を展開した。事前案内会にあたる「民話にふれよう」（講師と過去の事業体験者が民話を披露，秋の体験イベントのプログラムとして実施）の来場者は26名，計4回で構成された体験プログラム（小学生対象）の参加者は17名であった。このプログラム参加者がおぼえた民話を披露する最終回「民話を語ろう」には84名の来場者があった。本事業は，文化庁「地域の博物館を中核としたクラスター形成事業」の補助を得て実施した。	3
R2 ◎	○　前年度教育普及事業（各種講座・教室・体験イベント等）の総括をもとに課題に取り組むかたちで本年度事業を実施した。 ○　個別の事業では，まず新型コロナウイルス感染症対策を十分に講じた運営に取り組んだ（参加人数の制限や事前予約制の実施等を含む。）。その上で，来場者の動向やアンケート結果などを注視し，ニーズの把握と事業改善に努めて，新たなプログラムの導入やプログラム内容の質的向上を図った。以下に個別事業の概要を記載し，新たなプログラムには【A】，プログラムの質的向上を図ったものには【B】の記号を付す。 ［講座］ ○　館長講座は「明治維新と宮城の芸能」をテーマに全８回。参加者は340名。【B】 ○　歴史分野の学芸員が担当する史料講読講座（全３回）の参加者数は161名，古文書講座入門編（全3回）は149名，古文書講座中級編（全４回）は173名の参加があった。【B】 ○　考古分野の学芸員が担当する新設の考古学講座（全２回）の参加者数は24名。【A】 ○　民俗分野の学芸員が担当する民俗芸能講座（全３回）の参加者は１１２名。【B】 ○　学芸員の調査研究成果を発表するれきはく講座（全７回）の参加者は８４１名。【B】 ［体験教室］ ○　夏の体験教室では，親しみやすく参加したくなるような教室の展開を目指し「木簡で，おくれたー！？」・「災い飛んでいけ！」・「ガトーカワラを作ろう！」・「昔の絵の具を作ってみよう！」を実施した（計４回）。新企画を盛り込み，全体として満足度は高かった（計74名参加）。【A】・【B】 ○　冬の体験教室は，「ミニ屏風を作ろう！」・「「トンボ玉を作ろう！」・「冬のお仕事！ワラを使って作ってみよう！」・「篆刻にチャレンジしよう！」の計４回を1月に実施し，計69名の参加があった。季節を意識した新企画や人気の企画を盛り込み，好評であった。【A】・【B】 ［体験イベント］ ○　年3回の開催を予定していたが，春はコロナ禍で中止。秋・冬は参加定員を設けて事前予約制で開催し，秋は登録者数278名，プログラム総参加者数751名，冬は登録者数204名，プログラム総参加者数629名であった。新型コロナウイルス感染症対策を講じたうえでの運営であったが，秋は「日本の古墳」 ○「人形を流そう」・「吉祥結び」など，冬は「オリジナルの多賀城碑をつくろう！」・「今野家住宅で起し絵図をつくろう！」・「回れ！古代こま」・「博物館からの挑戦状！」・「のぞいてみよう！むかしの明かり」などの新企画を導入したことで，参加者の満足度は高かった。【A】・【B】 ［多賀城巡り］ ○　新型コロナウイルス感染症の影響によりハイキング形式の番外編（全3回）を中止し，本編も６回の開催となったが，復元工事が進む多賀城南門を中心に解説の充実を図った。参加者は計89名。【B】 ［民話事業］ ○　今野家住宅を活用した利府民話の会と多賀城民話の会による「民話を聞く会」（全３回）はコロナ禍で中止。 ○　小学生に民話語り手体験をしてもらう事業を新型コロナウイルス感染症対策を講じたうえで展開した。事前案内会にあたる「民話にふれよう」の参加者は31名，計4回で構成された体験プログラムの参加者は12名であった。このプログラム参加者がおぼえた民話を披露する最終回「民話を語ろう」の観覧者は６２名であった。本事業は，文化庁「博物館を中核としたクラスター形成事業」の補助を得て実施した。【B】	3
R3 ◎	○　各種講座・教室・体験イベントについて，新型コロナウイルス感染症対策をしながら円滑に運営し，参加者の歴史と文化に対する興味関心を高めることができた。特に古文書講座については，これまでの参加者からの要望を受けて，より初歩的な内容を盛り込んで実施し，好評を得た。 ○　体験イベントについては，昨年秋から人数制限・事前申し込み制を実施し，運営について改善を続けてきた。春のイベントでは，参加者の満足度がより高まるように個別プログラムの内容や体験人数などを見直し，参加者の満足度向上に努めた。チラシについても事前申し込み制が一目でわかるように工夫した。秋の体験イベントでは，一人が体験するプログラム数や参加時間帯の傾向を分析し，午前・午後の２部入れ替え制（事前申し込み制）で開催。新型コロナウイルス感染症対策を十分にしながら前年度以上の参加者を得た。 ○　体験を通して歴史を学習する場である子ども歴史館では，コロナ禍で十分な活動が困難であったが，感染症対策をとりながら解説員を中心にインタラクティブシアターとワークワゴンの運営を継続した。	3
R4 ◎	○　感染症対策を徹底した上で教育普及事業を計画し，体験教室や体験イベントにおいては，「貝の名前を調べてみよう」，「石包丁をつくろう」，「円筒ハニワづくり」，「それいけ！ネコレース」などの新規プログラムに取り組み，利用者のニーズを捉えた新鮮さを失わない事業を実施した。 ○　各講座や体験教室・体験イベントの参加者アンケートと動向を分析して改善点を検討し，事業の充実と効率化に取り組んだ。特に秋の体験イベントについては，定員のあるプログラムについて予約制を導入し，混雑の解消と申し込み手続きの改善を行った。 ○　新規の参加者獲得に向けて，幅広い層が参加したくなる企画を計画し，広報媒体にも，人物を入れて体験の楽しさを伝える工夫をするなど改善を行った。	4
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は「３～４」，５カ年平均「3.2」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　利用者のニーズを分析し，新たなプログラムを事業に反映させることは，満足度と再来館への意欲の向上に結びつくものである。 ○　第２期中長期目標においてもニーズや興味関心を的確に捉え，参加したくなる事業の充実に継続して取り組まれたい。	3.2

【活動方針】　(2)　学校が博物館を効果的に活用できることを目指します。

【達成目標】　⑥　学校利用に対する学習支援の充実を図ります。

【担当：企画部企画班，管理部情報サービス班】
○　体験授業や出前・館内授業等の学習支援を積極的に展開して学校団体の館利用促進に努めた。
○　更なる館活用の促進を目指し，新企画を含めたプログラムの再検討や学校団体との連携のあり方，運営体制の見直しも進めてきた。
○　R2.2からの新型コロナウイルス感染症の影響は大きく，学校団体の利用が激減したが，感染症対策を徹底しながら学習支援を継続した結果，徐々に利用が回復している。

年度	実　　績	評価
H30	○　既存の学習シートの改善に取り組み，より教科書に対応した学習シートの開発に向けて検討を進めている。 ○　学校団体との連携強化，学校団体の館利用促進を目指し，以下の企画を実施した。各企画の学校数は例年並みであるが，参加者数は増加している。更なる連携と館活用の促進を図るため，出前授業や団体利用プログラム等の課題について企画・情報サービス班内で協議し，新規企画を含めたプログラムの再検討や運営体制の見直しを進めている。 【出前授業】 ○　仙台市内小学校１校（40名）で，「昔の遊び」授業を実施した。 ○　仙台市内小学校１校（40名）で，「昔のくらし」授業を実施した。 ○　福島県内のイベントで，「発掘体験」授業を実施した（主な対象は未就学児）。 【館内授業】（展示解説除く） ○　多賀城市内中学校１校(161名)を対象に，地域学習の授業を実施した。 【体験授業】 ○　多賀城市内小学校１校（280名），仙台市内小学校１校（122名）を対象に，「タイムスリップ！縄文時代」展の展示体験前授業を実施した。 ○　山形県内小学校１校（12名）・美里町内小学校１校（26名）を対象に，「勾玉づくり体験」授業を実施した。 【職場体験】 ○学校からの依頼に応じ，10・11月に中学校４校の職場体験を実施した。実施にあたっては見学や解説，体験活動をバランス良く配分した内容となるよう留意した。	3
R1	○　こども歴史館では，小学校授業の社会科単元「昔のくらし」と連動するかたちで，少し昔の生活道具を触ったり体験したりできる特設コーナーを期間限定(1月～3月で設置し，利用者から好評を得た。本年度の試行を経て，来年度以降は本コーナーに加えて総合展示室（雑貨屋）・今野家住宅等を総合的に活用したプログラムを作成し，学校利用に対する学習支援の強化を図る予定である。 ○　また，学校団体との連携強化，学校団体の館利用促進を目指し，以下の企画を実施した。更なる連携と館活用の促進を図るため，団体利用プログラム・広報等の課題について企画・情報サービス班内で協議し，新規企画を含めたプログラムの再検討や広報，運営体制の見直しを進めている。 【館内授業】（展示解説除く） ○　多賀城市内中学校１校(183名)を対象に，地域学習の授業を実施した。 ○　松島町内小学校１校（48名）を対象に，今野家住宅をテーマにした昔の暮らしの授業を実施した。 ○　大崎市内高等学校１校（15名）を対象に，「カマガミ」をテーマにした地域の民俗史の授業を実施した。 【体験授業】 ○　山形県内小学校１校（23名）・美里町内小学校１校（20名）・多賀城市内高等学校(47名)を対象に，「勾玉づくり体験」授業を実施した。 【職場体験】 ○学校からの依頼に応じ，10・11月に中学校4校(12名)の職場体験を実施した。実施にあたっては見学や解説，体験活動をバランス良く配分した内容となるよう留意した。	3
R2	○　こども歴史館では，小学校授業の社会科単元「昔のくらし」と連動するかたちで，少し昔の生活道具を触ったり体験したりできる期間限定の特設コーナーを，昨年度よりも充実させて運営する予定で準備を進めていたが，新型コロナウイルス感染症の影響により中止した。その後も取り組みを継続しており，総合展示室（雑貨屋）・今野家住宅とあわせて総合的に活用する新たなプログラムを「新しい生活様式」を踏まえて作成中である。 ○　新型コロナウイルス感染症の影響により学校団体との連携強化，学校団体の館内利用促進を図ることが難しい状況にある。実際に，本年度は「職場体験」・「体験授業」を実施できていない。このような状況下で，新型コロナウイルス感染症対策を十分に講じた学校団体向けの館内利用方法を提案し，７月から団体の受け入れを再開した。学校団体の館内利用は徐々に増加しており，10月には多賀城市内中学校１校(169名)を対象とした地域学習の館内授業も実施している。 ○　更なる連携と館活用の促進を図るため，団体利用の状況把握や広報等の課題について企画班及び・情報サービス班内で協議し，新規企画を含めた総合活用プログラムの再検討や広報，運営体制の見直しを進めている。	3
R3	○　昨年度までの常設展を利用した学校団体へのアンケート結果と，展示室での活動内容の観察から，学習シートと探検カードに対するニーズが高いことがわかった。このことから，小学校・中学校の学習と博物館の展示とを関連させた学習シート案を作成し，展示をより活用できるよに準備を進めた。 ○　学習シートと探検カードを充実させ，これを中心に広報を展開し，学校利用の促進を図った。	3
R4	○　利用団体の希望を聞き取りし，効果的な学習ができるように見学・利用コースの提案に取り組んだ。 ○　学習シートの一部を更新し，常設展を利用して効果的に学習できる環境を整備した。 ○　多賀城市高崎中学校と共同して，多賀城の歴史や日本画についての授業を行ったり，オンラインで栗原市の小学校と民俗行事の共同授業を行ったりするなど，学校の学習支援を行った。 ○　学校からの依頼に応じ，職場体験の受け入れをに行った。 ○　修学旅行等の学校利用団体に対して，利用申し込みの際にＨＰに掲載しているワークシート等の活用について，活用を促すなど伝えることで博物館での効果的な学習となるように務め学習支援の強化となっている。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　博物館は，地域の主要な教育機関の一つであり，学びの場を提供しつづけることは責務であり，社会情勢や学校の変化に合わせて柔軟に学習支援をする必要がある。 ○　第２期中長期目標では，ＩＣＴの普及など学校の教育環境の変化に対応した取り組みを期待する。	3.0

３　調査・研究

【活動方針】　(1)　東北の歴史・文化等に関する調査・研究を推進し，その成果を積極的な公開・普及活動の基盤とします。

【達成目標】　⑦　研究テーマや目的を明確化し，成果を積極的に公開します。

【担当：学芸部学芸班】
○　調査研究事業は博物館活動の基盤という意識を館員間で十分に共有しながら，事業を推進した。
○　これら研究の成果は，「れきはく講座」や「研究紀要」等として広く県民に還元された。

年度	実　　績	評価
H30	○　研究分野ごとに調査研究・成果公開の内容と予定を明確にした事業計画（本年度計画及び5ヶ年度計画）を年度当初に策定し，4月の館員会議（全体会議）や定例開催の学芸会議で提示して館内でそれらの情報を共有している。現在，事業はいずれの分野も概ね計画通りに進捗している。さらに，必要に応じて随時，成果と課題に関する議論と総括を実施している。これらの成果は，研究紀要等の出版物，県民を対象とした「れきはく講座」等により公開を予定するなど，本年度の博物館事業に反映される予定であり，年度末に向けてさらなる上積みを図りながら次年度以降の研究計画にも活用されるよう計画を進めている。なお，主な成果だけでも研究紀要は7件の論文・報告を予定し，展示は特別展3件とテーマ展示12件（予定を含む），各種講座は「れきはく講座」7件（同左）を数え，この他にも随時，同種業務を実施しており，1人あたり2件以上の公開と地域への成果還元を達成する予定である。	3
R1	○　考古，民俗，歴史，美術工芸，建築，保存科学といった研究分野ごとに調査研究・成果公開の内容と予定を明確にした事業計画（本年度計画及び5ヶ年度計画）を年度当初に策定し，4月の館員会議（全体会議）や定例の学芸会議で提示して館内でそれらの情報を共有した。事業はいずれの分野も概ね計画通りに進捗した。さらに，必要に応じて随時，成果と課題に関する議論と総括を実施した。これらの成果は，研究紀要等の出版物，県民を対象とした「れきはく講座」等により公開し，本年度の博物館事業に反映させた。また，これら成果は，次年度以降の研究計画にも活用されるよう配慮しながら計画を進めた。なお，主な成果だけでも研究紀要は7件の論文・報告，展示は自主企画特別展「蝦夷」など特別展3件，「今野家住宅母屋建築250周年記念今野家住宅の歴史」などテーマ展示12件を数え，各種講座は「れきはく講座」5件を実施した。この他にも随時，同種業務を実施しており，1人あたり2件以上の成果を還元した。	3
R2	○　考古，民俗，歴史，美術工芸，建築，保存科学など研究分野ごとに調査研究・成果公開の内容と予定を明確にした事業計画（本年度計画及び複数年度計画）を年度当初に策定し，学芸会議等で提示して館内でそれらの情報を共有した。今年度は，新型コロナウイルス感染症対策のため当初計画の修正を行いながら，いずれの分野も概ね計画通りに進捗した。さらに，必要に応じて随時，成果と課題に関する議論と総括を実施した。これらの成果は，研究紀要等の出版物，県民を対象とした「れきはく講座」等により公開するなど，本年度の博物館事業に反映された。また，次年度以降の調査研究にも活用・展開できるよう配慮しながら計画を進めた。なお，主な成果だけでも研究紀要は7件の論文・報告を掲載し，展示は自主企画特別展「みやぎの復興と発掘調査」及び「伝わるかたち／伝えるわざ」など特別展2件，「郷土玩具の世界」などテーマ展示10件を実施し，各種講座は「れきはく講座」7件を実施した。この他にも随時，特別展解説など同種業務を実施しており，1人あたり2件以上の成果を公開した。	3
R3	○　考古，民俗，歴史，美術工芸，建築，保存科学など研究分野ごとに調査研究・成果公開の内容と予定を明確にした事業計画（単年度及び複数年度計画）を年度当初に策定し，学芸会議等で情報を共有した。事業は少なからず新型コロナウイルス感染症の影響を受けるものの，必要に応じて随時，成果と課題に関する議論と総括を実施しながら，いずれの分野も概ね計画通りに進捗した。これらの成果は，本年度の博物館事業として研究紀要等の出版物，県民を対象とした「れきはく講座」等による公開のほか，次年度以降の調査研究にも活用されるよう計画を進めた。なお，主な成果は，研究紀要は４６件の論文・報告を掲載し，展示は，自主企画特別展「みちのく　武士が愛した絵画」１件，宮城県の土師器」などテーマ展示１０件を実施するとともに，各種講座は「れきはく講座」が６件行われた。この他にも随時，特別展解説などを実施しており，１人あたり２件以上の公開と地域への成果還元を達成した。	3
R4	○　考古，民俗，歴史，美術工芸，建築，保存科学など研究分野ごとに調査研究・成果公開の内容と予定を明確にした事業計画（単年度及び複数年度計画）を年度当初に策定し，学芸会議等で情報を共有している。 必要に応じて随時，成果と課題に関する議論と総括を実施しながら，いずれの分野も概ね計画通りに進捗している。これらの成果は，本年度の博物館事業として研究紀要等の出版物，県民を対象とした「れきはく講座」等による公開のほか，次年度以降の調査研究にも活用されるよう計画を進めている。なお，主な成果は，研究紀要は6件の論文・報告を行い，展示は，自主企画特別展2件，テーマ展示11件を実施するとともに，各種講座として「れきはく講座」が7件実施された。この他にも随時，特別展解説などを実施しており，1人あたり2件以上の公開と地域への成果還元を達成した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　新型コロナウイルス感染症の影響を受け活動に制限がある中，事業の焦点を収蔵資料の整理・調査研究シフトするなど，業務に対する柔軟な対応について評価できる。 ○　第２期中長期目標においても，調査研究事業は，博物館活動や県民に対してその成果や情報が還元されて初めて事業として完結するものであることから，連携や獲得自体が「目的化」しないよう注意を払いながら事業を推進されたい。	3.0

【達成目標】　⑧　総合展示室リニューアルをはじめとする公開や教育普及，博物館運営等，博物館学的な研究をさらに推進します。

【担当：学芸部学芸班】
○　調査研究事業は博物館活動の基盤という意識を館員間で十分に共有しながら，事業を推進した。
○　新型コロナウィルス感染症の影響で各種研修会・会議の形態変化に柔軟に対応し博物館学的研究に務めた。
○　これら研究の成果は，事業運営や展示内容の改善などを通して広く県民に還元された。

年度	実　　績	評価
H30	○　総合展示リニューアルに向けて，2014年度から研究分野横断型の「歴史的災害展示研究」プロジェクトを推進し，さらに2017年度からの3ヶ年度にわたり科学研究費（基盤C「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」）を獲得したことにより，東日本大震災の経験に立脚しながら，歴史的に繰り返されてきた災害の実態を研究し，防災意識の向上にも配慮した新たな展示構成の構築とその具体化を目指している。現在，資料調査と研究会の開催を各1回開催している。 ○　博物館学研究について，事業計画（本年度計画及び5ヶ年度計画）を年度当初に策定し，その計画に基づき，資料保存と収蔵環境のさらなる向上を目指して「ＩＰＭ研修」へ，博物館事業や運営の充実のため「日本博物館協会研修会」など合計5件に職員を派遣しており，これらの成果は学芸会議などで報告・協議され，館内で情報が共有されている。 上記については，年度末に向けて，さらなる上積みを図り，研究を推進する予定である。	3
R1	○　総合展示リニューアルに向けて，平成26年度から研究分野横断型の「歴史的災害展示研究」プロジェクトを推進し，さらに平成29年度からの3ヶ年度にわたり科学研究費（基盤C「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」）を獲得したことにより，東日本大震災の経験に立脚しながら，歴史的に繰り返されて きた災害の実態を研究し，防災意識の向上にも配慮した新たな展示構成の構築とその具体化を目指している。その成果として，資料調査を2回，研究会を3回開催した。さらに，本プロジェクトによる研究の総括として，成果をとりまとめた「試行展示」を2月26日から3月8日にかけて開催し，その情報を館内で共有した。 ○　博物館学研究について，事業計画（本年度計画及び5ヶ年度計画）を年度当初に策定し，その計画に基づき，資料保存と収蔵環境のさらなる向上を目指して「国宝・重要文化財（美術工芸品）防災・防犯対策研修会」，「ＩＣＯＭ京都大会」，「歴史民俗資料館等専門職員研修会」及び「文化財防災ネットワーク研修」等へ，また，博物館事業や運営の充実のため「日本博物館協会東北支部総会・研修会」，「東北地区博物館実務担当者会議」及び「全国歴史民俗系博物館協議会」など合計7件に職員を派遣しており，これらの成果は学芸会議などで報告・協議され，館内で情報が共有された。	3
R2	○　博物館学的な研究については事業計画を年度当初に策定し，その計画に基づき推進する予定であったが，新型コロナウイルス感染症の感染拡大により外部研修の殆どが中止または次年度へ延期になったことから，当初の計画の修正を余儀なくされた。そのような中，博物館事業や運営の充実のため「公益財団法人日本博物館協会東北支部研修会・視察研修会」に職員を派遣することができ，これらの成果は学芸会議などで報告・協議され，館内で情報が共有さ れた。	3
R3	○　博物館学的な研究については事業計画を年度当初に策定し，その計画に基づき推進する予定であったが，新型コロナウイルス感染症の感染拡大により外部研修の殆どが中止または次年度へ延期になったことから，当初の計画の修正を余儀なくされた。そのような中，博物館事業や運営の充実のため「公益財団法人日本博物館協会東北支部研修会・視察研修会」に職員を派遣するとともに，「文化庁令和３年度歴史民俗資料館等専門職員研修会」，「文化庁令和３年度文化財（美術工芸品）保存修理講習会」，「文化庁令和3年度ミュージアムマネジメント研修」及び「文化庁令和３年度博物館学芸員専門講座」を受講し，博物館運営ならびに博物館学的研究を推進した。	3
R4 ○	○　博物館学的な研究については年度当初に策定した事業計画に基づき推進した。これまで，「文化庁指定文化財（美術工芸品）企画・展示セミナー」，「国立文化財機構奈良文化財研究所デジタルアーカイブ研修」，「公益財団法人日本博物館協会東北支部実務担当者研修会」等で研修・討議を進めるとともに，「文化庁公開承認施設担当者会議」及び「文化庁防災防犯対策研修会」を受講し，最新の博物館学を吸収するとともに博物館運営ならびに博物館学的研究を推進した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　新型コロナウィルス感染症等の社会情勢の変化及び博物館学の進展などに伴い，博物館が取り組むべき新たな課題も共有されつつあり，第２期中長期目標においても積極的に本業務が推進され県民に還元されることを期待する。	3.0

【活動方針】　⑵　他の博物館・研究機関との連携を深め，調査・研究活動の質の向上を目指します。

【達成目標】　⑨　調査・研究予算確保のため，外部資金の導入を図ります。また，他の博物館や研究機関・団体と連携協力して行う事業を展開します。

【担当：学芸部学芸班】
○　調査研究事業は博物館活動の基盤という意識を館員間で十分に共有しながら，事業を推進した。
○　また，調査研究予算が逼迫する状況を鑑み，外部研究との連携や外部予算の獲得に努めた。
○　県の内外を問わず研究機関・団体と連携し調査研究と，次代を担う人材の育成に務めた。
○　これらの成果は，特別展等の展示事業や講座等の教育普及事業など当館の博物館活動に活用され，県民へ公開・還元した。

年度	実　　績	評価
H30 ○	○　調査研究事業に充当する外部資金として，科学研究費1件（基盤研究C「被災物の活用のための劣化特性と保存法の解明」）と一般財団法人住環境財団研究助成1件（「絵画資料を用いた中近世における窓・建具の流通に関する研究」）の計2件を新たに獲得した。採択済の科学研究費2件についても引き続き活用している。さらに，次年度の科学研究費を獲得するため，本年度も保存科学分野及び美術工芸分野から新たに2件の応募を行った。また，広く博物館活動全体に充当するため，「被災ミュージアム再興事業国庫補助金」を獲得し被災資料の保全などを実施するほか，宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会が実施する国庫補助事業「しおがま・まつしま文化財めぐり活性化事業」の事業主体者としてその事業と予算を文化財調査及び普及活動に活用している。 ○　外部機関との連携協力では，協定を締結した3件（継続1件，今年度新規2件）を始めとして，国や地方公共団体を始めとする公共機関，県内外の博物館施設，大学，民間などと連携して調査研究を積極的に推進している。それらの成果は，展示や普及事業など多岐に亘る当館の博物館事業に活用され，県民へ還元されている。さらに，次年度も他機関の研究への協力者として新たに2件の応募を既に行っており，これにより一層の研究の推進と連携協力を図っていく。また，博物館実習では19名の実習生を，東北大学との連携大学院では2名の大学生をそれぞれ受け入れ，人材育成に努めている。	3
R1 ○	○　調査研究事業に充当する外部資金として採択済の科学研究費2件（基盤C「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究及び基盤C「被災物の活用のための劣化特性と保存法の解明」）を引き続き活用した。また，次年度以降の調査研究事業に充当する外部資金として，本年度は新たに保存科学分野及び民俗分野から科学研究費2件の応募を行った。さらに，広く博物館活動全体に充当するため，「被災ミュージアム再興事業国庫補助金」を獲得し被災資料の保全などを実施するほか，宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会が実施する国庫補助事業「しおがま・まつしま文化財めぐり活性化事業」の事業主体者としてその事業と予算を文化財調査及び普及活動に活用した。 ○　外部機関との連携協力では，秋田県及び岩手県などの近隣県や塩竈市及び東松島市など県内市町村を始めとする地方公共団体，秋田県立博物館や塩竈神社博物館などの県内外の博物館施設，東北工業大学や特定非営利活動法人一関文化会議所など大学及び民間等と積極的に連携を図り，協働による調査研究を推進した。それらの成果は，特別展等の展示事業や講座等の教育普及事業など多岐にわたる当館の博物館活動に活用され，県民へ還元された。さらに，次年度も他機関の研究への協力者として新たに2件の応募を既に行っており，これにより一層の研究の推進と連携協力を図っていく。また，博物館実習では19名の実習生を，東北大学との連携大学院では2名の大学生をそれぞれ受け入れ，人材育成を行った。	3
R2 ○	○　調査研究事業に充当する外部資金として採択済の科学研究費1件（基盤C「被災物の活用のための劣化特性と保存法の解明」）を引き続き活用した。また，次年度以降の調査研究事業に充当する外部資金として，本年度は新たに保存科学分野から科学研究費1件の応募を行った。さらに，広く博物館活動全体に充当するため，「被災ミュージアム再興事業国庫補助金」を獲得し被災資料の保全などを実施するしたほか，宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会が実施する国庫補助事業「しおがま・まつしま文化財めぐり活性化事業」及び「宮城県の無形文化遺産情報発信事業」の事業主体者として，その事業と予算を普及活動に留まらず文化財調査にも活用した。 ○　外部機関との連携協力では，資料調査について秋田県及び岩手県などの近隣県，保存環境調査・構築構築の連携支援で宮城県，塩竈市及び大崎市など県内市町村を始めとする地方公共団体，保存環境調査・構築支援及び資料調査等の連携支援で名取市歴史民俗資料館，石巻市立博物館（仮称）及び国立民族学博物館などの県内外の博物館施設，東北大学，弘前大学及び中央大学や特定非営利活動法人栗駒山麓ジオパーク推進協議会など大学及び民間等と積極的に連携を図り，調査研究を推進した。それらの成果は，特別展等の展示事業や講座等の教育普及事業など多岐にわたる当館の博物館活動に活用され，県民へ還元された。さらに，次年度も他機関の研究への協力者として新たに2件の応募を既に行っており，これにより一層の研究の推進と連携協力を図っていく。また，博物館実習では19名の実習生を受け入れ，人材育成に貢献した。	3
R3 ○	○　調査研究事業に充当する外部資金として科学研究費では，令和２年度採択済の「恒久的の保存に向けた災害被災資料の特性解明と保存環境の構築」1件を活用した。また，次年度以降の調査研究事業として，新たに保存科学分野と考古研究分野から各1件を科学研究費に応募した。さらに，広く博物館活動全体に充当するため，宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会が実施する国庫補助事業「しおがま・まつしま文化財めぐり活性化事業」及び「宮城県の無形文化遺産情報発信事業」の事業主体者として，その事業と予算を普及活動に留まらず文化財調査にも活用した。 ○　外部機関との連携協力では，資料調査については秋田県及び岩手県などの近隣県と，保存環境調査・構築構築の連携支援では，塩竈市及び大崎市など県内市町村を始めとする地方公共団体，保存環境調査・構築支援及び資料調査等の連携支援では名取市歴史民俗資料館，石巻市博物館及び国立民族学博物館などの県内外の博物館施設，東北大学，弘前大学及び中央大学や特定非営利活動法人栗駒山麓ジオパーク推進協議会など大学及び民間等と積極的に連携を図り，調査研究を推進した。それらの成果は，特別展等の展示事業や講座等の教育普及事業など多岐にわたる当館の博物館活動に活用され，県民へ公開・還元された。さらに，次年度も他機関の研究への協力者として新たに２件の応募を既に行っており，これにより一層の研究の推進と連携協力を図っていく。また，博物館実習では１９名の実習生と，東北大学連携大学院「文化財科学」等による学生１名の受入・指導をそれぞれ行い，将来の博物館を担う人材育成に貢献した。	3
R4 ○	○　外部資金として科学研究費では，令和2年度採択済1件，令和4年度採択2件，計3件を活用した。また，次年度以降の調査研究事業として新たに考古研究分野から1件を科学研究費に応募した。 ○　外部機関との連携協力では，調査研究について大崎市，仙台市及び石巻市などの県内市町村，秋田県及び岩手県などの近隣県，筑波大学及び東北大学等研究機関を相手方として推進しており，これらの成果は特別展等の展示事業や講座等の教育普及事業など多岐にわたる当館の博物館活動に活用され，県民へ公開・還元された。また，博物館実習では15名の実習生と，東北大学連携大学院「文化財科学」等による学生1名の受入・指導をそれぞれ行い，将来の博物館を担う人材育成に貢献した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　研究事業の維持・展開にも当然，予算が不可欠で，自由闊達な研究推進のため外部資金の導入は今後も必要な取り組みであり，更なる獲得への努力を期待する。 ○　複雑・多様化する社会の期待に応えるため，他機関との連携強化に努め，研究や人材育成をより一層推進する必要がある。	3.0

４　資料の収集と保管・管理

【活動方針】　(1)　東北の歴史・文化等に係わる資料を系統的に収集し，その積極的活用を図ります。また，収集した資料の特質に応じた適正な保存管理策を講じ，後世へ継承します。

【達成目標】　⑩　研究分野ごとの資料収集方針に基づき，計画的な資料収集を行います。

【担当：学芸部学芸班】
○　文化財を未来へ確実に受け渡す責務を果たすべく，研究分野ごとの資料収集方針等に基づき，寄贈・寄託資料の受納等による資料収集，さらには美術品等取得基金による資料購入を推進した。

年度	実　　績	評価
H30	○　研究分野ごとに収集方針を立案し，それに従って情報収集や調査研究を進め，寄贈・寄託に至った資料は資料取扱要項など所定の手続きを厳正に履行しながら受納を行っている。現在，「戦時債券」1件13点を始めとする寄贈，文化財課から移管された考古資料695箱の受納などの事務処理が完了しており，他に美術工芸資料1件2点などについて年度末に向けて受納手続きを進めている。 ○　新たな収集予算確保とその活用について，関係課などと引き続き協議を進めている。これにより，資料収集事業に対して新たな財源を確保するよう努めているところである。また，財源確保など新たな枠組みによる資料収集の体制を整える過程で，中長期的な資料収集計画を取りまとめる予定である。	3
R1 ○	○　研究分野ごとに収集方針を立案し，それに従って情報収集や調査研究を進め，寄贈・寄託に至った資料は資料取扱要項など所定の手続きを厳正に履行しながら受納を行っている。現在，「カマガミ」1件1点、「トランジスタラジオコレクション」1件56点及び「東東洋筆唐人物図」ほか2件2点について受贈手続が完了した。 ○　今年度から資料収集に「美術品等取得基金」の利用が可能となったことから，購入候補資料として美術工芸資料3件4点を選定し，「東北歴史博物館協議会資料収集専門部会」の承認を得て購入した。これにより，平成19年度以来12年度ぶりとなる購入による資料収集が実現した。	3
R2 ○	○　研究分野ごとに収集方針を立案し，それに従って情報収集や調査研究を進め，寄贈に至った資料について，資料取扱要項など所定の手続きを厳正に履行しながら受納した。今年度は，「伊藤瓦工場関連資料」1件163点，「日本近現代貨幣等資料」47件89点，「宮城県小学校地域学習資料」2件2点，「BCL（海外短波放送受信）関係資料等歴史資料」4件48点，「『東洋』落款鯉魚・昇竜図屏風」1件2点，「東仙台佐藤家資料」1件168点，「オーディオ家電関連製品等，昭和後半期生活文化資料」7件380点，「平成19年度受納「菊地武彦家資料」追加資料」1件4点について受納手続が完了した。 ○　令和元年度から資料収集に「美術品等取得基金」の利用が可能となったことから，今年度も購入候補資料を選定し購入を図ることとしていたが，新型コロナウイルス感染症の感染拡大により資料調査など所定の事前準備を進めることができなかった。したがって，今年度は次年度以降の資料購入を円滑に推進するよう，感染症拡大の動向を注視しながら事前準備を進めた。 ○　図書資料については，購入予算確保のため外部基金へ応募するとともに，寄贈による図書資料の充実のため対象資料の選定を進めた。	3
R3 ○	○　今年度も資料収集方針に基づいた計画的な資料収集を進め，これまでに歴史資料２件２点，考古資料１件１点及び１件１式，美術工芸資料２件２点を受納した。また，昨年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大による事前準備の停滞のため，美術品等取得基金を利用した資料購入について断念せざるを得なかったが，今年度は資料収集専門部会に購入候補資料９件１１点を諮り，承認された。	3
R4	○　資料収集方針に基づいた計画的な資料収集を進め，これまでに美術工芸資料1件1点の寄贈，歴史資料1件77点の寄託を受けた。また，次年度以降の資料収集に向けて準備作業を積極的に推進した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　今後とも，資料収集方針及び資料取扱要領等に基づき適切に執行されたい。	3.0

【達成目標】　⑪　収蔵環境を整備し，より安定的な資料保全を図ります。

【担当：学芸部学芸班，管理部管理班】
○　文化財を未来へ確実に受け渡す責務を果たすべく，収蔵品管理，収蔵環境管理を推進した。
○　浮島収蔵庫の老朽化，同収蔵庫資料整理について喫緊の課題であると認識のもと，応急対応に努めた。

年度	実　　績	評価
H30 ◎ ○	○　本館及び浮島の両収蔵庫について，定期環境調査を毎月実施するとともに，7月と12月の2回に亘り全館全室を対象とした委託環境調査を行い，収蔵環境の維持・改善を進めている。さらに，1月には学芸職員による収蔵庫の定期清掃を実施し，より良い収蔵環境を構築した。 ○　経年劣化が甚大かつ保管容量が逼迫する浮島収蔵庫については，部分的な不具合などの応急処置を施すとともに，今後の収蔵庫のあり方，現在収蔵される資料と今後の収蔵予定資料の取り扱いなど，文化財課と協議を進めている。また，文化財課が懸案事項に掲げ，教育庁内での協議も進められている。なお，この間もより一層の環境改善を行い，収蔵場所の確保に努めている。また，環境改善には，科学研究費（基盤C「文化財収蔵のための緊急時における非文化財収蔵施設の活用調査と低コスト運営法の開発」）の成果が活用されている。	3
R1 ◎	○　本館及び浮島の両収蔵庫について，定期環境調査を毎月実施するとともに，7月と12月の2回に亘り全館全室を対象とした委託環境調査を行い，収蔵環境の維持・改善を進めた。さらに，1月には学芸職員による収蔵庫の定期清掃を実施し，より良い収蔵環境の構築を目指した。 ○　経年劣化が進み，かつ保管容量が逼迫する浮島収蔵庫については，部分的な修繕を施すとともに，今後の収蔵庫のあり方，現在収蔵される資料と今後の収蔵予定資料の取り扱いなど，文化財課と協議を進めた。なお，浮島収蔵庫は文化財課が懸案事項に掲げ，教育庁内での議論も進められている。学芸部は，定期的な収蔵環境調査を毎月1回行うなど，より一層の環境改善を行い，収蔵場所の確保に努めた。	3
R2 ◎	○　本館及び浮島の両収蔵庫について，定期環境調査を毎月実施するとともに，7月と12月の2回に亘り全館全室を対象とした委託環境調査を行い，収蔵環境の維持・改善を進めた。さらに，12月に学芸職員による収蔵庫の定期清掃を実施したことにより，より良い収蔵環境を実現した。 ○　経年劣化が甚大かつ保管容量が逼迫する浮島収蔵庫については，部分的な修繕を施すとともに，今後の収蔵庫のあり方，現在収蔵される資料と今後の収蔵予定資料の取り扱いなど，主管課と協議を進めた。また，現在浮島収蔵庫に収蔵される資料について，将来の収蔵場所の移動などを見据え，属性に応じた資料の選定及び資料群ごとの物量把握を進めた。	3
R3 ◎	○　収蔵庫等の温湿度の恒常的なモニタリング及び温湿度変動期の速やかな処置等を通して，温湿度の安定化をはじめとした収蔵環境の管理方法等の精査・改善を推進した。 ○　浮島収蔵庫の考古資料特別整理にかかる資料総数の再確認及び業務量の積算を進めた。	3
R4 ◎	○　収蔵庫等の温湿度の恒常的なモニタリング及び温湿度変動期の速やかな処置等を通して，温湿度の安定化をはじめとした収蔵環境の管理方法等の精査・改善を推進した。 ○　浮島収蔵庫の考古資料特別整理にかかる資料総数の再確認及び業務量の積算を進めた。 ○　浮島収蔵庫で度重なる虫菌害への処置を積極的に推進した。また，同収蔵庫屋上陸屋根等からの大規模漏水についても防止策の検討とともに，防水工事実施に向けて関係機関との協議・調整を進めている。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，収蔵環境は概ね適切に維持されている。 ○　浮島収蔵庫収蔵品の保全に対する学芸員の地道な努力については特に評価したい。 ○　今後とも，浮島収蔵庫老朽化問題の抜本的解決のため，財政を含む関係者合意形成に向け一層のモニタリングや現状保全に係る業務量の積算に努められたい。	3.0

【達成目標】　⑫　収蔵資料のデータベースをさらに充実させ，インターネット等を活用して収蔵資料の情報公開を推進します。また，実物資料及び写真資料，図書資料の貸出・閲覧・撮影等にも適切に対応します。

【担当：学芸部学芸班】
○　文化財を未来へ確実に受け渡す責務を果たすべく，計画的に資料出納，デジタルデータへの変換を行い，その情報公開を推進した。
○　保存管理と活用との両立を実現すべく，資料出納及び資料利用について適切に対応した。

年度	実　　績	評価
H30	○　本年度は，データベースのさらなる充実を目指して登録作業を精力的に推進している。現在，画像資料686点と図書資料1,344点を新規登録している。登録作業は，年度末に向けてさらなる上積みを図り，次年度以降に予定される情報公開に活用される予定である。 ○　実物資料は，仙台藩大肝煎吉田家文書などの資料目録の作成も進めており，完了し次第，ホームページ上で資料目録を公開する予定である。資料の利用については，画像の貸与が現時点で71件277点を数えることを始めとして，多くの需要に応じて業務を適正かつ円滑に推進している。	3
R1	○　本年度は，データベースのさらなる充実を目指して登録作業を精力的に推進した。現在，画像資料241点と図書資料1,725点を新規登録しており，このうち図書資料については当館ホームページでの情報公開を行っている。 ○　実物資料は，上記⑩受贈資料の情報公開を年度内に実現すべく，その準備を進めている。また，当館が所蔵するVHS等の二次資料789点のうち194本のデジタル化，3～5分程度のダイジェスト映像全30本のうち5本を併せて作成し，公開した。 ○　資料の利用については，画像の貸与が現時点で69件241点を数えることを始めとして，多くの需要に応じて業務を適正かつ円滑に推進した。	3
R2	○　データベースの充実を目指して登録作業を精力的に推進した。今年度は画像資料等864点と図書資料等1976点を新規登録しており，このうち図書資料については当館ホームページでの情報公開を行った。また，当館が所蔵するVHS等の二次資料553点のデジタル化に取り組むとともに，デジタル化と並行して3～5分程度のダイジェスト映像11本を作成し公開した。併せて，仙台藩大肝煎吉田家文書などの資料目録の作成も進めた。 ○　資料の利用については，実物資料の貸出が30件1456点，画像等の貸出が70件171点を数え，多くの需要に応じて業務を適正かつ円滑に推進した。	3
R3	○　各研究分野で未公開資料ならびに新収蔵資料を中心に約３００点の整理・データベース化を計画的に進めた。 ○　図書資料約２，０００点及び動画・デジタルメディア約３０点の登録整理・データベース化を推進し，公開した。 ○　二次資料再整理計画に基づき，作業を推進した。とくに，VHSビデオテープに格納される動画アナログデータ約８０本のデジタル変換及び公開を年度末に行うため，作業を進めた。 ○　実物資料貸与約３０件及び写真資料貸与等約６０件，図書資料の閲覧・レファレンス約４００件に適切に対応した。	3
R4	○　各研究分野で未公開資料ならびに新収蔵資料を中心に約140点の整理・データベース化を計画的に進めた。 ○　デジタルを含む図書資料約1,300点の登録整理・データベース化を推進し，公開した。 ○　実物資料貸与約10件及び写真資料貸与等約50件，図書資料の閲覧・レファレンス約120件に適切に対応した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　文化財のデジタルアーカイブ化と情報公開・活用は近年とくにその重要度を増していることから，今後も更なる取り組みの強化を期待したい。	3.0

５　情報の発信

【活動方針】　(1)　当博物館の存在や活動・事業の内容等を積極的にお知らせします。

【達成目標】　⑬　わかりやすいアクセス情報を提供します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　来館者の増加につながるよう，来館者目線に立って電柱広告や道路看板の配置の見直しを進めた。
○　スマートフォン等の普及に合わせ案内方法の最適化に努め，アクセスに対する電話対応が低減し，利用者の利便性が図られた。

年度	実　　績	評価
H30	○　特別展開催期間中は多賀城市と塩竈警察署の許可を得て，市内に大きな表示で分かりやすい案内表示を設置した。 （常設用６２ヶ所・特別展用１１ヶ所） ○　電柱広告の案内看板設置を継続し，道路形状の変更により見えづらくなった看板の設置位置変更を行った。 ○　ナビゲーションシステムに対応した適切な所在地情報に対応させるため，地図データ作成業者と修正の打ち合わせを行った。	3
R1	○　年３回開催された特別展の案内看板をその都度作成し，開催期間中博物館周辺の道路上に設置したほか，国道から博物館までの車の誘導として，主な交差点，多賀城市役所及び東北学院大多賀城キャンパスなどの周辺に設置した。 ○　電柱広告の案内看板設置を継続し（62カ所），道路形状の変更により見えづらくなった看板（1カ所）の設置位置変更を行った。	3
R2	○　特別展開催（年３回）の都度，案内看板を作成し，開催期間中博物館周辺の道路上に設置したほか，より見やすいものとなるように展示担当と協力しながら改善を進めた。 ○　電柱広告の案内看板設置を継続（62カ所）するとともに，利用者がより認知しやすい位置への設置について，委託業者と調整し看板（1カ所）の設置位置変更を行った。	3
R3	○　特別展開催の都度，当館駐車場への導線を統一したサインで明示した看板を，周辺道路上に設置したほか，問い合わせに対する電話応答例文を整理し，わかりやすい誘導に努めた。 ○　当館で契約している電柱看板の設置箇所について，撤去可能なものの洗い出しとともに，利府方面ルートにおける移設候補地の検討調整を図った。	3
R4 ○	○　秋季特別展からは，東部道路仙台港北ＩＣ及び多賀城ＩＣを利用した来館者を想定した設置箇所の見直しを検討し，新規配置と廃止を実施しこれまで以上に効果的な案内看板となるよう工夫した。 ○　「2022.12～2023.3催事カレンダー」の交通案内地図に当館駐車場に誘導するための「ナビＱＲコード」を配置し現在地から，当館までの道順を表示できるようにした。	4
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は「３～４」，５カ年平均「3.2」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　更なる来館者の利便性向上のため，今後とも情報端末の普及・進化に合わせて案内の最適化や予算配分について検討していく必要がある。	3.2

【達成目標】　⑭　多賀城市及び近隣市町との連携を強化します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　当館の催事について，多賀城市や近隣市町に広報誌への掲載依頼など様々な広報活動を行い集客に努めた。
○　地域イベントでは，共催・後援として関り，会場運営や施設供与などで連携・協力し地域の魅力発信に務めた。
○　R2.2から続く新型コロナウィルス感染症の影響により，連携行事が停滞していたが少しずつ再開し，Withコロナにおける今後のあり方を検討しながら進めた。

年度	実　　績	評価
H30 ◎	○　近隣市町（仙台市，多賀城市，塩竈市，七ヶ浜町，利府町，松島町）へ当館催事情報等の掲載依頼を定期的，継続的に行った。 ○　特別展「東大寺と東北」を多賀城市とともに開催し，多賀城市が主催する特別展関連イベントへの協力を行った。 ○　多賀城市主催の「あやめ祭り」の後援をしたほか，「あやめ祭り」のライトアップイベントに合わせて，ナイトミュージアムを行ったほか，光のアートイベント「幸せ色の多賀城」や，「史都多賀城万葉まつり」に共催として関わり，会場運営や施設使用等の協力を行った。 ○　東大寺展開催期間から，南側ピロティに机・椅子を置き来館者が休憩できるスペースを設け，「”伊達”な文化」魅力発信推進事業実行委員会や多賀城市の作成した観光案内パンフレットやポスターを置き，近隣市町の観光情報を発信した。	3
R1 ◎	○　広報誌に当館催事情報枠がある多賀城市と松島町には，毎月の催事情報を提供し掲載いただいている。他の近隣市町（仙台市，塩竈市，七ヶ浜町，利府町）にも催事情報等の提供を定期的，継続的に行った。 ○　特別展「スーパークローン展」の塗り絵付き割引券の配布を多賀城市教育委員会を経由して，市内の小学校全児童に配布依頼し，市立図書館でも配布協力を行い，市民の誘客を図った。 ○　多賀城市主催「あやめ祭り」と相互協力し，両会場でポスター掲示とチラシ配布を行い広報を行った。 ○　特別展「蝦夷」の関連イベントとして，特別観覧企画を多賀城市と連携して実施し，地元の歴史と多賀城跡への理解を深める企画を行った。また，特別展チラシを市報と一緒に多賀城市全戸に配布するよう協力をもらい，市民に対して広報を行った。 ○　多賀城市民図書館において，学芸員による特別展関連講演会（モダンデザイン展及び蝦夷展）を行い，図書館利用者への解説と特別展の広報を行った。	3
R2 ◎	○　近隣市町との連携を図るため，多賀城市報に当館催事情報枠をもらい，毎月の催事情報を掲載している。他の近隣市町（仙台市，塩竈市，七ヶ浜町，利府町，松島町）にも当館の催事情報等の提供を定期的に行っている。また，特別展「ＧＩＧＡ・ＭＡＮＧＡ展」では，多賀城市民図書館に関連図書コーナーを設け，特別展開催期間中に図書館利用者に対して特別展の広報を行ったほか，特別展「伝わるかたち/伝えるわざ」では，追加広報として，近隣２市３町（多賀城市，塩釜市，七ヶ浜町，利府町，松島町）の教育委員会の協力のもと，各中学校の全生徒に向けてチラシを配布し誘客を図った。 ○　来館者への近隣市町の情報提供としては，多賀城市主催の「アートワークイベント」に共催しイベント開催の協力をしたほか，多賀城創建１３００年紹介パネル展を当館エントランスで特別展「伝わるかたち/伝えるわざ」の開催期間中に実施し，地元の歴史に対する理解を深め，多賀城南門建設への理解を高める企画を行った。	3
R3 ◎	○　多賀城市及び近隣市町における歴史・文化事業や観光事業等で制作する雑誌等に当館の展示や催事情報等を提供するなど相互協力を進めた。 ○　１階及び３階エントランスを中心に，近隣市町の催事情報をポスター掲示・チラシ配架を適時行い，来館者のへ情報提供に努めた。 ○　ジェラシック大恐竜展では「多賀城市民特別観覧日」の設定や多賀城市による「光のインスタレーション」の開催など，多賀城創建1300年に向け連携を強化した。	3
R4 ◎	○　春季特別展期間中に多賀城市観光協会主催の「多賀城カレーフェスティバル」や3年ぶりに開催された「あやめまつり」会場にて主催者と連携をとりながら，当館へ誘客を目的とした，ＰＲ活動及びチラシ配布を行うことで特別展の周知に務めた。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　近隣市町広報誌等を通じた博物館催事の周知，来館者への近隣市町の催事情報提供などで連携して事業運営にあたった事は評価できる。 ○　第２期中長期目標においても，多賀城創建１３００年記念事業等の大型イベントが予定されていることから，地域の魅力・催事などの把握に努め，地域に根差した連携を進められたい。	3.0

【達成目標】　⑮　館のロゴを制定し，館のシンボルとして活用します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　選定プロセスの検討を重ね，公募，検討委員会による選考を経てロゴマークを選定した。
○　新型コロナウィルス感染症によるスケジュールの遅れもあったが，その活用方法について検討を重ね，認知度を高めるための様々な取組を行ってきたが，認知度が十分とまでは言えない状況である。

年度	実　　績	評価
H30	○　東北地方の基幹的な歴史系博物館として，どのようなロゴがふさわしいか，制定後の利活用と併せて，その制定方法と制定時期，スケジュールについて検討する。第1回の検討会を12月中旬に開催した。	2
R1 ○	○　10月10日から12月10日まで中学生以上を対象にロゴマークを公募し，299作品の応募があった。 ○　11月14日に外部委員5人で組織された第1回ロゴマーク検討委員会，2月13日に第2回ロゴマーク検討委員会を開催し，応募作品の選定に向けた話し合いが行われ，候補として3作品が館長に答申された。また、3月3日に各部で候補作品への意見と活用方法の検討を行い、その結果を踏まえて館長がロゴマークを決定した。	3
R2 ○	○　令和2年3月にロゴマークを決定後表彰式を延期していたが，6月6日にロゴマーク表彰式を開催し制作者に表彰状を授与した。 ○　制定作業時に職員から提案されたロゴマーク活用案を参考にしながら，実践できるものから実施している。具体的な実践例は下記のとおり。 ・常設展示室前の壁に大きなロゴマークを掲示したり，館内の掲示物に必ずロゴマークを入れ来館者にＰＲした。 ・年報や特別展ポスターやチラシ，報道機関投げ込み資料などにロゴマークを入れ広報に活用した。 ・職員の名刺フォームを作成した。 ・ホームページのトップ画面やＳＮＳで紹介し，多くの人にロゴマークを認知してもらうように努めた。	3
R3 ○	○　当館ウェブサイトのシンボルマーク・イメージとして，ロゴマークを設定した。favorite iconとして，当館ホームページのブランディングを図った。 ○　県内小中高２年目教員対象の初任研講義において，当館利用方法とともに，ロゴマークとイメージキャラクター「コロリン」について周知・PRを行った。	3
R4	○　来館者へのロゴマークの周知普及のため，来館者通路に，ロゴマークを中心としたのぼり旗を設置した。 ○　ミュージアムショップと連携し，ロゴマーク入りオリジナル不織布バッグを制作し１月より販売を開始した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度の評価は「２～３」，５カ年平均「2.6」で全体の中で低い評価となった。 ○　素晴らしいデザインのロゴマークを制定できたことは評価できるが，ロゴマーク入りのオリジナルグッズ制作などの有効活用に至らなかったことが，評価が低かった要因と考えられる。 ○　活用アイデア次第で認知度の向上が見込まれることから，今後の取り組みに期待したい。	2.8

【達成目標】　⑯　来館者の増加につながるような実効力のある効率的な広報を展開します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　催事テーマ等に応じて広報先や方法等を検討し，効率的かつ効果的な情報発信を行った。
○　特別展においては多賀城市や関係機関と連携・協力による様々な広報活動や，積極的な報道機関の活用により，県民への周知機会を得た。
○　従来の紙媒体による広報のほか，情報端末の普及・進化に合わせてＳＮＳ等による即時性のある情報発信を行った。

年度	実　　績	評価
H30 ◎ ○	○　特別展については，通常の広報に加え展示毎にメインとなる客層に直接アピールする広報を工夫した。小学生向けの特別展については，通常のチラシ配布の他に，県内の小学校高学年（5，6年生）の児童全員にチラシを配布した。 ○　講座，イベント等については，目的・内容毎に発送先や部数，発送方法等を精査し，効果的な広報が出来るよう工夫した。小学生対象のイベントは，近隣市町の小学校にチラシを持参し情報提供を行った。 ○　過去に利用していたが，来館しなくなった県外小中学校を確認し，旅行業者等を通じて来年度の催事情報の提供と来館の働きかけを行っている。テーマ展示や催事等の広報については，通常の手段に加え展示資料に縁のある市町村広報担当者へ直接情報提供を行った。 ○　「東北文化の日」ガイドブック等での施設紹介を行った。県教育委員会のホームページ上でも特別展の広報を行い，多くの人の目に触れるようにした。 ○　県庁及び教育事務所の区分箱の活用，宅配便やレターパックの活用のほか，新たに仙台市教育委員会の区分箱を使用し，経済的・効率的な広報が出来た。 ○　周辺地域の文化財や観光情報等もあわせて発信するスペースとして活用する南側ピロティを東大寺展開催期間は活用したが，これ以降は十分な活用が出来ていない状況にある。	3
R1 ◎	○　特別展のポスター・チラシの配布について，企画部と相談しながら計画してきた。配布箇所の厳選をする一方で，集客が見込める配布先には数を増やすなど，特 別展を観覧にくる客層を考慮しながら広報を行ってきた。特に，今年度は，クローンやモダンデザインといったこれまで当館で行ってきた歴史系の展示とは異なる特別展が開催されたため，情報収集を行いつつ，個別にポスター・チラシを配布していくなどの方法も用いた。 ○　学校団体の受け入れに際して，活動目標の達成ができるように引率の先生方と連絡を取りながら，活動を進めた。学校団体へのアンケートの結果，来館に関す る満足度の質問について，「満足」70.0%，「おおむね満足」23.9%であり（3月末現在），前年度（「満足」64.5%，「おおむね満足」27.4%）と比較して，満足度がわずかではあるが向上した。 ○　来館者の増加につなげるとともに，当博物館の活動をＰＲする観点から，近隣学校に体験イベントなどのチラシを配布したほか，多賀城市・塩竈市の公民館や図書館等に重点的に館長講座のチラシを配布した。 ○　特別展や関連イベントの取材をテレビ局や新聞社，雑誌やフリーペーパー等に依頼し，広報することができた。 ○　「東北文化の日」や「芸術銀河2019」に参加し，ガイドブック等で施設紹介やイベント紹介をした。 ○　宮城県や宮城県教育委員会のホームページトップ画面で特別展バナーを掲載した。 ○　仙台市内・大崎市内の公共宿泊施設のロビーに特別展や館長講座のチラシを設置してもらうことができた。	3
R2 ◎	○　特別展の広報としては，夏・秋の特別展のポスター・チラシ配布を，企画部と相談しながら内容に沿った配布先を検討し，配布箇所の厳選をする一方で，集客が見込める配布先には数を増やすなど，特別展の観覧が見込まれる客層を考慮しながら行ったほか，これまでに送付していない箇所へ送付し，新規客層への広報にも努めた。また，夏の特別展では，小学校高学年に向けたミニチラシ（割引券付）を県内すべての小学校４～６年生の児童へ配布し，その保護者を含めた若い年齢層の集客へつなげる努力をした。特別展や関連イベントの取材をテレビ局や新聞社，雑誌やフリーペーパー等に依頼し広報した。みやぎWI-FIや宮城県教育委員会のホームページトップ画面で特別展バナーを掲載した。 ○各種講座やイベントは，ＳＮＳへ定期的に情報を掲載し，より多くの人から認知されるよう努め　た。また，体験イベントや民話イベントなどのチラシを近隣市町（多賀城市，塩竈市，利府町，七ヶ浜町，仙台市の一部）の小学校等に重点的に配布した。 ○　教育普及に関する広報として，学校団体の受け入れに際して，引率の先生方と直接連絡を取りながら予約調整を進めながら情報提供を行った。具体的には，「施設の使用制限」や「当館の感染症対策」の状況をHPで随時更新し，情報の周知に加え，予約済みの団体に対し，臨時休館等のお知らせや再度予約の方法をFAXの一斉送信等で適時情報提供を行なった。観覧のモデルケースを作成し，利用団体が観覧スケジュールを組みやすいように配慮した情報提供を行うことにより，施設の利用が制限されている中でも，団体利用予約の対応をスムーズに行なうことができた。安心して見学することができたという，アンケートでの記述が見られた。 ○　館の広報としては，「東北文化の日」や「芸術銀河2020」に参加し，ガイドブック等で施設紹介やイベント紹介をしたり，宮城県教育旅行ガイドブックで施設紹介を行った。今年度は新規で，「Ｓ－ｓｔｙｌｅ・Ｋａｐｐｏ」特別編集の「宮城を楽しむおでかけ＆宿」で施設紹介をしている。また，フリーペーパーの「ちかてつさんぽ」や「みやぎイベントＪＯＹ」や「まなびのめ」などには，継続的に催事情報の掲載をしており，館の認知度を上げる取り組みを行っている。	3
R3 ◎	○　特別展では，企画部広報担当者や特別展担当者と連携し，海外雑貨店との連携（デンマークデザイン展），県内全小学生へのチラシ配布（恐竜展），県芸術協会・画材店へのチラシ配布（絵画展）など，想定ターゲットに応じた広報に努めた。 ○　講座，イベントでは，当館ホームページやＳＮＳ等で素早い情報提供に努めた。特別展関連イベント告知において，ＳＮＳを週一回ペースで配信し，適時適　切なタイミングでの周知に努めた。 ○　教育普及（学校団体）では，予約受付時に予約状況を提示して，丁寧な予約調整に努めた。コロナ禍における変更・キャンセルに柔軟に対応した。 ○　広報展開では，今年度の特別展（３件）について，雑誌広告「S-style,Kappo」に時機に応じた広告掲載を行い，企画内容と近しいジャンルに関心がある購読者を対象とした情報を発信し，当館のブランド価値を高めた。	3
R4 ◎	○　各季特別展では企画部広報担当者や特別展担当者と連携し，毎回の依頼先に加えて展示会ごとに個別に依頼する広報先を特別展の趣旨や内容を考慮して選定し，ポスター・チラシの配布先を変えながら行った。 ○　SNS（Twitter）のフォロワー数が増えれば，発信する情報も沢山の人の目にすることになるが，今年度は特別展共催団体との協力もあり，年度当初900人台であったが，現在は2,000人を超えるフォロワー数となったことは成果として挙げられ，幅広い世代への当館の活動について理解を深めてもらう素地ができつつある。 ○　テレビ・新聞等へのプレスリリースについては，開幕式だけではなく会期中での取材依頼のメール等を行い，生中継やニュース報道により来館者が誘客された。今後も継続して同様の展開を行っていく。	4
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は「３～４」，５カ年平均「3.2」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　更なる博物館や催事等の周知のため，今後とも情報端末の普及・進化に合わせて広報方法を最適化していくこととなるが，情報リテラシーに十分配慮した上で検討していく必要がある。	3.2

【達成目標】　⑰　他館と連携した広報を行うとともに，館内掲示物を充実させます。

【担当：管理部情報サービス班】
○　特別展や催事の開催について美術館，図書館，博物館などと相互に連携・協力して広く情報発信を行った。
○　新たな広報手段として，デジタルサイネージを導入し多角的な広報や利用案内を展開した。
○　県美術館とは入館料の相互割引を継続し，来館者の利便性を確保した。

年度	実　　績	評価
H30	○　宮城県美術館と連携して催事情報提供を行っており，相互割引，広報を今後も継続していく。 ○　東大寺展の誘客イベントとして，当館・ＴＦＵギャラリーミニモリ・三井アウトレットパーク仙台港と合同でスタンプラリーを実施した。当館の認知にもつながった。 ○　イベント開催時には，エントランスホール入り口とインフォメーション前に掲示板を出して，来館者にわかりやすく目にとまるよう適宜工夫して設置している。 ○　3階情報コーナー等の館内掲示物は，掲示期限を確認し，期限が過ぎたものは入れ替えを行った。	3
R1	○　宮城県美術館と連携して催事情報提供を行っており，相互割引，広報を実施した。 ○　宮城県図書館と連携し，特別展に関連した書籍情報を紹介するコーナーをエントランスに設置した。 ○　催事，講演会等の際は，エントランスを中心にその都度，案内看板やポスター等を作成した。新たな取組みとして，館長講座の次回予告を毎回作成し，エントランスに掲示したり，蝦夷展連続講座の案内を毎回作成し，講堂入口に掲示した。	3
R2	○　宮城県美術館と連携してホームページなどで催事情報などの広報を行い，あわせて特別展の相互割引を実施し，ポスター，チラシ，チケットに互いの特別展情報を記載し広報，誘客に努めた。 ○　他館との連携としては，宮城県図書館と連携し，特別展「ＧＩＧＡ・ＭＡＮＧＡ展」の展示内容に関連のある書籍を紹介するコーナーを図書館に設けて，特別展の広報に努めた。また，新しい取り組みとして，特別展「ＧＩＧＡ・ＭＡＮＧＡ展」では，石ノ森萬画館の特別展「はじめの一歩」と共催し，缶バッチイベントや相互割引を実施したり，萬画館オリジナルグッズを当館ショップで販売するよう調整し誘客に努めた。 ○　館内掲示環境の整備として，中央ロビーにある掲示内容を展示担当者の協力を得て，見やすいものに変更した。また，夏季期間熱中症対策の一環として飲料許可の表示を作成し，来館者にへの周知した。催事や講演会等の際は，エントランスや講堂にその都度，案内看板やポスター等を作成し掲示した。昨年度に引き続き，館長講座の次回予告を毎回分作成し，エントランスや講堂入口に掲示した。 ○　新型コロナウイルス感染症の対策として，当館主催の催事は原則として事前申込制としたことから，エントランスにコーナーを設けて受付中の催事一覧を掲示し，来館者がその場で申し込みができるようにした。	3
R3	○宮城県美術館との相互割引を継続実施するとともに，秋季特別展に係る瑞巌寺との連携割引など，これらの情報を中央ロビーのサイネージに掲示することで，来館者への確実な情報発信を行い，仙台・松島方面への周遊に繋げた。	3
R4	○　デジタルサイネージを活用した宮城県美術館との相互割引，広報を継続実施を行った，７月からはミライロＩＤの普及に向けて利用施設としての登録を行い周知普及に務めた。 ○　ＳＮＳ（Twitter，Facebook）では，特別展をはじめとして催事等の情報を，こまめに発信ができたことで，事前の問い合わせが減少した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　引き続き紙媒体での相互連携は必要と考えるが，デジタルサイネージの普及を見据えて，デジタル情報のやり取りなど時代に合わせた広報のあり方を検討する必要がある。	3.0

【活動方針】　(2)　インターネットを通じて情報の速やかで効果的，魅力的な発信に努めます。

【達成目標】　⑱　ホームページを充実します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　ホームページの構成は，当館に関心を持つように親しみやすい情報など取り混ぜ，またタイムリーな情報も積極的に発信することで利用者の利便性向上に務めた。
○　ＳＮＳを併用し即時性の高い情報提供を行った。

年度	実　　績	評価
H30	○　展示や催事，館からのお知らせ等，きめ細かな情報掲載をした。また，画像を多く取り入れ視覚的にわかりやすいものなるようにした。特に，特別展の情報は時系列に掲載し，取り組みがわかるようにした。 ○　イベント等の開催情報のホームページ掲載時期が遅くなってしまったものが，何件があった。	3
R1 ○	○　ホームページの更新について，「トピックス」は，平均すると週2.2回の更新がなされている。特に，毎週末に開催されるイベントの告知を定期的に行った。特別展示が開催された期間はアクセス件数も昨年度より増加しており，定期的な更新の成果であった。 ○　「トピックス」・「展示」・「催事」などにおいて，画像を用いて視覚的に伝える機会を増やし，見やすいページ作りに努めた。	3
R2 ○	○　「トピックス」・「展示」・「催事」などは，写真や画像を多く使いわかりやすく説明することに心がけ，紹介したいイベント等を利用者がイメージしやすいページ作りに努めた。 ○　トップページに週末のイベント情報枠を新たに設け，翌週のイベント情報を毎週更新して利用者への情報提供を継続して行った。また，ＳＮＳ（ツイッターとフェイスブック）を活用し，特別展示室内を写真で随時紹介したり，開催日が重複するイベントの広報はSNSへの掲載日を調整しながら情報発信を行い，タイムリーな話題の提供に努めた。 ○　新型コロナウイルス感染防止の取り組みや，施設の使用人数などの情報はトップページに大きく色を変えて表示し，利用者が必要な情報がすぐに見られる画面づくりに努めた。	3
R3 ○	○　写真などを用い見やすいレイアウトを工夫するとともに，恐竜展CM動画の掲載なども取り入れ，利用者の興味を高めた。「週末イベント情報」のほか，夏季特別展における当館利用の際の「混雑回避のコツ」等，親しみやすい情報をSNSとホームページに掲載し，利用者の利便性向上に取り組んだ。	3
R4 ○	○　トピックス欄が文字情報だけだったため，写真を掲示し見やすいレイアウトとなるように改善した。 ○　ホームページ上の「週末イベント情報」をSNSと連動することで効果的な情報発信となった。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　トピックス欄の効果的運用，写真等を活用した訴求効果を高める工夫は，現在のシステム環境下にあっては評価できるものである。 ○　次期システム更新にあたっては，利用者のＰＣからスマートフォンやタブレット端末へのシフトと捉えたWebアクシビティに配慮する必要がある。	3.0

【達成目標】　⑲　ＷＥＢや電子メールを活用し事業を促進します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　ホームページでの来館者に向けた情報発信と県広報を活用したＳＮＳ発信から，当館独自のＳＮＳへシフトし誘客に向けた魅力的な情報発信を行った。
○　イベント参加申請では，対面・電話対応から電子メールさらに「みやぎ電子申請サービス」へと活用の定着を図り，結果としてコロナ禍における非接触，人数制限，時間指定などの対応に大いに寄与することとなった。

年度	実　　績	評価
H30	○　県教育委員会のホームページ，県広報課のフェイスブックを使った広報を実施した。 ○　全国にイベント情報を提供しているインターネットサービスを利用し，特別展，催事，イベント情報を提供した。 ○　職員ポータルの掲示板機能を利用し，特別展関連行事をイベント案内として情報提供した。 ○　ツイッターの導入については引き続き検討していく。	3
R1	○　県教育委員会のホームページ，県広報課のフェイスブックを使った広報を実施した。 ○　全国にイベント情報を提供しているインターネットサービスを利用し，特別展，催事情報を提供した。 ○　職員ポータルの掲示板機能を利用し，特別展関連行事をイベント案内として，情報提供した。 ○　館内情報システムの更新にあわせて，新たにホームページのＳＮＳ機能（ツイッターとフェイスブック）の整備を進めた。	3
R2	○　県教育委員会とみやぎFree-wifiのホームページに，３つの特別展の広告バナーを掲載し広報を行った。また，県広報課のフェイスブックで，秋季特別展と関連イベントの告知を２回，県メルマガで秋季特別展の告知を１回実施した。 ○　全国にイベント情報を提供しているインターネットサービス（チラシミュージアム，イベントバンク，美術の窓，日本学術研究支援協会，LUCHTA，ｉｎｔｅｒｉｏｒ‐ｊｏｈｏ.ｃｏｍなど）を利用し，特別展，催事情報を提供した。 ○　WEBや電子メールでの予約申し込みを継続実施した。団体予約は９９件（全体の45%），講座参加は４６７件（全体の27%）（１２月末日現在）の申し込みを受け，受付後に速やかに確認メールまたはFAXを返信することで利用者の利便性を高めた。 ○　令和２年５月１４日からSNSの運用を本格的に開始し，特別展や催事に関する広報を継続的に行なった。週平均3回程度，特別展開催期間中は週4～5回程度更新し，情報発信に努めた。	3
R3	○　県教育委員会ホームページバナー広告のほか，twitterやFacebookによる広報に力を入れた。 ○　みやぎ電子申請サービスの活用を段階的に進め，年度後半から，定員を設けた催事の参加受付等で本格運用を開始し，効率的な集約作業の環境を整えた。	3
R4	○　各種講座等催事の参加申し込み受付を「みやぎ電子申請サービス」にすることにより，事前にホームページの注意書き等を読む必要があるため，電話での対応が減少した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　情報端末の普及・進化に合わせて取組み内容を変遷していったことは評価できる。 ○　今後も，情報リテラシーにも配慮しながら，効果的な計画を実行されたい。	3.0

６　県民参加

【活動方針】　（1）　利用者のニーズが博物館運営に十分に反映されるよう努めます。

【達成目標】　⑳　来館者のニーズを把握し，そのニーズに対応します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　より多くの意見をいただくため，アンケート回答方法について様々な試みを行いながら可能なものから順次対応してきた。
○　情報端末の普及・進化に合わせてアンケートを電子申請サービスへシフトしたことで，素早いニーズの把握が可能となり業務改善につながった。

年度	実　　績	評価
H30 ◎	○　特別展アンケートの回収率を上げるため一昨年度から実施した次回特別展招待券プレゼント（抽選）の特典付加を継続実施した。 ○　特別展のアンケート等で寄せられた要望については，展示担当に情報提供を行い，展示期間中に対応可能なものは速やかに対応し，課題として残ったものは次回以降の展示に反映できるようにした。 ○　学校団体（小・中学校）へのアンケートを継続し，感想や要望等の分析結果を職員や解説員と共有した。 ○　アンケート集計処理をＯＣＲにより行い簡便な集計方法を導入した。	3
R1 ◎	○　特別展開催期間中は来館者アンケートを実施し，集計結果を企画・学芸と共有しながら，お客様から提案のあったキャプションの文字の大きさや特別展示室内の照明，「途中に椅子を設置して欲しい。」等の意見を取り入れ，よりよい展示になるように務めてきた。 ○　特別展アンケートの回収率を上げるため，回答者に次回特別展招待券のプレゼント（抽選）の特典付加を継続実施した。 ○　学校団体へのアンケートを行い，児童・生徒にとって学びやすい環境作りに努めてきた。具体例として，学習シートを学校側に事前に紹介し，その活用を促したことや，児童生徒の荷物等を置く場所を，できる限り提供し，集中して見学ができるようにしたことがあげられる。	3
R2 ◎	○　学校団体担当者の観覧後のアンケートからニーズを把握し，児童・生徒にとって学びやすい環境作りに努めた。具体的対応としては，当館作成の学習シートを学校側に事前に紹介し，その活用を促したり，児童・生徒が集中して見学できるよう，研修室等の使用調整を行い荷物等を置く場所をできる限り提供した。 ○　夏季特別展では当館での記入式の観覧者アンケートは行わなかったが，共催の毎日新聞社のＷｅｂアンケート結果（回答者332人）を提供いただき，来館者のニーズ把握などの分析を行うとともに館内で共有した。今後の特別展運営や広報計画に生かしていく。 ○　秋季特別展では館内での記入式の観覧者アンケートを実施し，回答結果の内容をまとめ企画・学芸部に伝え，特別展示室内の照明やキャプションなどの改善の意見を取り入れ，より良い展示になるよう努めた。 ○　特別展アンケートの回収率を上げるため，回答者に次回特別展招待券のプレゼント（抽選）の特典付加を継続実施した。 ○　新型コロナウイルス感染症に対応するため，新たなアンケートの一つとして，「みやぎ電子申請システム」を使ったアンケートが実施可能か検討している。	3
R3 ◎	○　特別展に係る統計分析において，コロナ禍における消費行動と観覧者の動態を検証し，感染拡大期の各局面に対応した安全対策プランを構築し，催事運営に努めた。また，アンケートを電子申請へ切り替えを図り，緻密に観覧者のニーズが掴めるよう設問項目の大幅な見直しを行った。	4
R4 ◎	○　みやぎ電子申請サービスを活用した催事アンケートを完全実施することで，これまでの紙ベースでのアンケート取りまとめに比べ事務処理時間が短縮し業務改善が図られ，速やかなデータ分析と情報共有が図られ，来館者ニーズへの素早い対応が可能となった。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は「３～４」，５カ年平均「3.2」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　貴重な意見をいただくため，今後とも情報端末の普及・進化に合わせてアンケート方法・内容を最適化していくこととなるが，情報リテラシーやサイレントマジョリティーに十分配慮した上で推進していく必要がある。	3.2

【活動方針】　(2)　博物館への県民参加を，積極的に推進します。

【達成目標】　㉑　館内ボランティア業務を円滑に運営します。

【担当：企画部企画班】
○　古民家を主体とする博物館ボランティアと，体験イベント等を主体とする大学生ボランティアの二つについて活動の円滑化に努めた。
○　R2.2からの新型コロナウイルス感染症の影響は大きく，R2年度についてはボランティア活動を休止した。
○　再開後は，感染症の情勢を見ながら柔軟に対応し円滑に運営しているが，以前のような活発な活動には回復しておらず，情勢を見ながら持続可能なボランティア活動を検討し，県民参加を推進する。

年度	実　　績	評価
H30	○　博物館ボランティアについては，メンバーとの意見交換をもとに運営面での改善を実施し，業務についての共通理解を深めた。また，世話人会の運営，研修会の企画・運営，研修旅行へ同行するかたちでの他館ボランティア業務の調査，共同での行事開催準備等を行い，メンバーとの友好的な協力体制の構築に努めている。 ○　大学生ボランティア（臨時）については，県内大学２校にて募集説明会を実施するとともに，１校のボランティア支援課に赴き，体験イベント等における大学生ボランティア参加に対する協力を依頼した。体験イベント等に参加してくれた大学生ボランティアに対しては，事業の趣旨や内容等について丁寧な説明を行い，当館の教育普及事業への理解を深めてもらった。 ○　特別展「東大寺と東北」の関連行事（砂金採り体験）では，大学生ボランティアを募集し，博物館活動への参加の場を提供した。	3
R1	○　博物館ボランティアについては，世話人会の運営や研修会の企画・運営，体験イベントの企画，行事開催準備等を共同で行うことにより業務についての共通理解を深め，メンバーとの友好的な協力体制の構築に努めた。 ○　大学生ボランティア（臨時）については，県内大学２校にて募集説明会を実施した。体験イベント等に参加してくれた大学生ボランティアに対しては，事業の趣旨や内容等について丁寧な説明を行い，当館の教育普及事業への理解を深めてもらっている。	3
R2	※　新型コロナウイルス感染症の影響により，活動を休止したため評価除外。	
R3	○　コロナ禍の中でも可能な博物館ボランティアの活動方針と募集方法・運営を検討し，活動を再開できた。 ○　博物館ボランティアの活動について整理し，今野家住宅の維持管理や体験イベントでの運営補助など，安心・安全なボランティア活動の場を提供し，運営を円滑に行った。 ○　体験イベントにおける大学生ボランティアについては，コロナ禍の情勢をみて今年度は活動を見合わせた。来年度以降の活動再開に向けて，大学の関係部署と情報共有し，協力体制の維持を確認した。	3
R4	感染症対策を十分に講じ，安心・安全なボランティア活動の場を提供した。 ○　今野家住宅におけるボランティア活動については，内容・体制について感染症の情勢をみながら柔軟に対応し，円滑な運営を行った。 ○　新型コロナウイルス感染症の影響で，延期していた長期継続ボランティアについて表彰式を実施し，ボランティア登録者の意欲向上に繋げた。 ○　体験イベントにおける大学生ボランティアについて大学関係部署と連携して募集を行い，学生の博物館活動への参加を推進した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　新型コロナウィルス感染症の影響で，従前の活発なボランティア活動は難しい状況となっているが，Withコロナを見据えた円滑な運営と，参加者自身が達成感とおもしろさを感じられる内容をめざして取り組む必要がある。	3.0

【達成目標】　㉒　博物館友の会の活動に対し支援をしながら，自立した会の体制整備に向けて助言，提案をします。

【担当：管理部情報サービス班，企画部企画班，学芸部学芸班】
○　博物館友の会の自立運営を目標として，サポートに徹するよう意識して対応に当たってきた。
○　役員及び会員の意識改革が少しずつ進んでいるが，新型コロナウィルス感染症の影響により行事の中止など活動が停滞した時期もあり，徐々に行事も再開しているが，今後も暫くはサポートを行う必要がある。

年度	実　　績	評価
H30	○　各特別展開催に際し，前日の内覧会を共催した。 ○　事務局として会の企画・運営，会誌（「友の会だより」）の刊行等について支援を行っている。 ○　友の会主催の各種企画（歴史講座，歴史探訪会，体験教室，会員交流会，バックヤードツアーなど）の立案に際して助言を行い，実施に際して連絡調整や進行，内容に応じて講師を務めるなどして，様々な支援や協力を行っている。 ○　友の会の各種企画（歴史講座，歴史探訪会，体験教室，バックヤードツアーなど）の立案に助言し，実施においては連絡調整や進行，企画によっては講師としてなど，様々な形で支援・協力している。また，サポーター制度により登録した会員が，友の会の事務局業務に協力してもらうことで，今後，自立した会の体制整備が出来るように支援した。 ○　会員数は500件796会員（12月1日現在）　　昨年比14件27会員増	3
R1	○　研修旅行及び主催講座をはじめとする友の会の活動に，事務局として会の企画・運営や会誌(「友の会だより」)刊行・学術情報の提供等の支援・協力を行い，円滑な活動の推進に努めた。また，各特別展開催に際し，前日の会員限定内覧会を共催した。 ○　これまで事務局が担ってきた会計業務を，役員側で行う移行に向けた工程作りにアドバイスをしながら取り組んだ結果，友の会の自立化に向けた第一歩として，令和2年度入会申込者の会費は，全て口座振込を実施し，令和２年度から会計業務を役員主体に移行することが決定した。	3
R2	○　研修旅行及び主催講座をはじめとする友の会の活動に，事務局として会の企画・運営や会誌（「友の会だより」）刊行・学術情報の提供等の支援・協力を行い，円滑な活動の推進に努めた。また，新年度の会員証作成は継続して博物館が行う予定である。 ○　役員主導に移行した会計業務は，通帳の名義変更手続きに必要な書類を適時準備したり，友の会が「支払請求書」の様式を作成するにあたり助言するなどの支援を行い，滞りなく進めることができた。	3
R3	○　館内に置く事務局は会員証の発行事務や役員会・総会運営への支援・助言に努めた一方，友の会行事・企画・会計処理などについては，役員会が主体的に行っており，自律的な運営への移行が定着した。 ○　友の会発足１０周年記念講演の企画運営について，館として支援・協力した。また，斎宮歴史博物館との公開講座に係る情報提供を行うなど，会員の学びの機会を提供した。	3
R4	○　役員を中心とした自立的な会の体制整備に向けて必要な助言や提案を行うことで，組織として機能し自立が進んでいる。特に，コロナウィルス感染症対策も整い，これまで休止していた外部での活動も再開し始めており，職員の若干の支援だけで実施できている。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　各種事業の立案・企画・調整の支援により自立した組織へと変化していることは評価できる。 ○　今後も更なる会の自立運営のための支援や協力が必要と考えられる。	3.0

【達成目標】　㉓　大学等学校単位での利用を促進します。

【担当：管理部情報サービス班】
○　博物館を活性化させるため，大学等の要望を聞き入れながらキャンパスメンバーズ制度を創設し6校の加入でスタートした。
○　加入期間は年度単位であるため，継続と新規加入の獲得に向けた情報の発信，特典の検討を重ねR4.12現在10校が加盟。
○　制度を利用した学生の観覧が増加しており，新規顧客の獲得に繋がっている。

年度	実　　績	評価
H30	○　大学等の要望を聞き取りながら，参加を希望する大学等が参加しやすい制度の運用を行った。 ○　新たに設けたキャンパスメンバー制度に６校の大学が入会し，サービスを利用した。	3
R1	○　キャンパスメンバーズ加入大学等への特別展，催事等の情報提供を行い，利用促進の広報を行った。	3
R2	○　加盟校へ新入生用のキャンパスメンバーの案内チラシや，特別展ごと（年3回）にポスターやチラシ，催事等の情報提供を行い，利用促進の広報を行っている。 ○　新規の勧誘としては，加盟校以外の団体予約で来館した大学等（専門学校デジタルアーツ仙台，東北芸術工科大学，専門学校日本デザイナーズ学院，宮城大学）の担当者に，制度を紹介し加入案内と資料の配布を行った。	3
R3	○　加盟校へ新入生用のキャンパスメンバーズ制度の案内や，特別展のポスター・チラシ，催事等の情報提供を行い，利用促進の広報を行った。	3
R4	○　今年度，勧誘パンフレットの改善や大学への働きかけにより聖和学園短期大学と放送大学宮城学習センターが新規加入した。併せて，割引制度を利用した学生の常設展・特別展の増加に繋がっている。	4
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は「３～４」，５カ年平均「3.2」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　現在10校ではあるが，「学都仙台」に隣接している利点を活かし，今後も加盟校増に向けて様々な取組みの検討と魅力的な情報発信に務めていく必要がある。	3.2

７　施設の整備・管理

【活動方針】　(1)　利用者が利用しやすい施設・設備環境に向けて検証と改善を行います。

【達成目標】　㉔　施設設備整備検討委員会で現状を再検証し，障害者や海外の方を含めた全ての来館者の安全と文化財の保全管理に配慮した施設設備を整備します。

【担当：管理部管理班】
○　平成２６年度に策定した年次計画について，毎年の環境変化を考慮して見直しを行い，計画的な整備・改修に努めた。
○　当館では，閉館せずに改修を行うことから，工事施工にあたり，来館者の安全確保，催事の運営，資料の管理等で各部班間の計画調整を行い，概ね計画どおりに進捗している。

年度	実　　績	評価
H30 ◎ ○	○　関係機関と随時協議し，来館者の安全と文化財保全管理のため，老朽化した施設設備の整備を年次計画に基づき実施し，年度内に完了する予定である。 ・自動火災報知器更新改修工事（第2期）　・総合展示室等照明ＬＥＤ灯改修工事 ・空調配管改修工事 ○　県有建築物保全点検において，危険防止の観点から早急な対策が必要とされたことに基づいて，今年度中に高圧気中開閉器交換工事を施工する予定である。 ○　各部ごとの整備要望等を整理しながら，次年度以降の施設設備の整備計画見直しの準備を進めている。	2
R1 ◎	○　関係機関（営繕課・設備課・文化財課）と随時協議し，来館者の安全と文化財保全管理のため，老朽化した施設整備を年次計画に基づき実施した。 ・ 館内照明改修(1・3・4階)　・ 非常用照明・誘導灯改修(1階・地階) ・ 今野家住宅屋根葺替　・ 高圧気中開閉器改修　・ 中央監視装置改修（設計） ・ 浮島収蔵庫落下危険物撤去（設計）　・本館外壁タイル・床改修（設計） ○　施設整備委員会を開催し各部の意見を集約した上で施設整備計画を見直し，令和2年度の当初予算を要求した。	3
R2 ◎	○　施設整備計画に基づき，以下の工事等を順次実施し，来館者の安全と文化財の保全管理を図ることとしている。 ・照明設備改修工事（２．４階一般照明，２～４階非常照明） ・中央監視制御設備改修工事（R2～R3　2カ年工事）　・X線透視装置改修工事 ・浮島収蔵庫落下危険物撤去工事　・本館外壁タイル・床改修工事　・冷却塔改修工事 ・エレベーター改修工事（設計）　・総合展示室リュイールランプ改修工事（設計） ○　新型コロナウィルス感染症対策として，消毒液やアクリルパネルの設置，不特定多数が触れる場所の消毒等を行った。 ○　施設設備整備検討委員会を開催し，現状の把握と今後の改修方針について協議を行った。	3
R3 ◎	○　施設整備計画に基づき，以下の工事を順次実施し，来館者の安全と文化財の保全管理を図った。 ・中央監視装置改修工事　・エレベーター改修工事 ・総合展示室リュイールランプ改修工事　・今野家住宅カブキモン等改修工事 ・講堂照明改修工事（設計）　・空調機器類改修工事（設計） ○　新型コロナウィルス感染症対策として，サーマルカメラ，消毒液等の設置や，不特定多数が触れる場所の定期的な消毒作業等を行った。	3
R4 ◎	○　施設整備計画に基づき，以下の工事を順次実施し，来館者の安全と文化財の保全管理を図った。 ・講堂照明改修工事 ・空調機器類改修工事（R4～R5） ・講堂音響映像設備改修工事	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度の評価は「２～３」，５カ年平均「２.８」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　施設設備の整備にあたっては，現状を把握し，劣化度や優先度を検証するとともに，計画の適宜見直しと，来館者の安全と文化財の保全管理を確保した対応に努められたい。	2.8

【達成目標】　㉕　情報システムを更新します。

【担当：管理部情報サービス班，管理部管理班】
○　現システムの適切な維持管理並びに機能更新を行った。
○　新型コロナウィルス感染症の影響により主流になりつつあるＷｅｂ会議・研修会等に対応した機器更新を行った。
○　次期システム更新に向けて，スマートフォンやタブレット等情報端末機器の普及状況や進化を見据えながら計画を進めている。

年度	実　　績	評価
H30 ○	○　情報システムのセキュリティー向上とシステムの安定性を考慮した更新がスムーズに行えるよう，関係各課と事前協議を重ね，予算編成前から取り組んだ結果，令和２年度当初予算において，情報システム更新のための予算を組み入れることができた。 ○　ホームページの多言語化やＳＮＳ機能の整備には至らなかった。	3
R1	○　情報システム更新に向け、適切に入札・契約手続きを進めた。 ○　令和2年1月より，ＳＮＳ機能が付加された新規システムに移行した。	3
R2	○　SNS機能を効率的に活用するため，「東北歴史博物館SNS運用計画」に基づき，企画部，学芸部，管理部が分担して，当館の催事や活動について情報発信を積極的に行っている。現在，ツイッターのフォロワー数は２１７人，また，フェイスブックの閲覧数も徐々に増えてきている。 ○　利用者への安定した情報サービスの提供を図るため，情報システム全体の運用支援業務を業者に委託し，毎月1回の定期点検を行いセキュリティの安全性を確認するとともに，必要なアップデートを随時行っている。 ○　次回更新期限は令和6年12月末の予定である。	3
R3	○　講堂等でWEB会議等が実施できる仮設環境整備に取り組んだ。将来ICTを活用した恒常的なサービスが展開できるよう，講堂等のネットワーク拡張や展示室内の管理用無線LANの整備について，情報収集に着手した。 ○　特別展会期中に週一回ペースで催事情報を配信した。SNSのフォロワー数の増加を目指し，周知効果の高いアカウントのフォローバックを行った結果，twitterフォロワー数が２０１→724と約３.５倍に増加した。（R4.3.1現在） ○　Googleマイビジネスに登録し，マップエンジン最適化対策を開始した。	3
R4 ○	○　令和６年１２月の次期情報システムに向け要望等の取りまとめを行った。 ○　講堂の映像配信システムについてアナログ映像からデジタル映像への改修工事を完了した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　求められる機能が変遷する中で，費用対効果を考えながら対応してきたことは評価できる。 ○　新システム構築には，安定性とセキュリティの安全性を最優先課題としながらも，外部サービスの利用を含めハード・ソフト両面において次代を見据えて検討し，関係者の合意形成を図る必要がある。	3.0

【活動方針】　(2)　災害時に博物館として，また県の施設として機能できるようにします。

【達成目標】　㉖　災害時の施設利用・管理について取扱いを整備します。

【担当：管理部管理班】
○　災害応急マニュアルの見直しと防災訓練の実施により，来館者の安全確保に務めた。
○　大規模災害時に県立施設として各種要請に対応できるよう必要な調整を行った。

年度	実　　績	評価
H30 ○	○　大規模災害時の災害応急対策を検討した。 ○　次年度に向けて，災害発生時等の対応を体系化した「危機管理マニュアル」を作製している。 ○　災害発生時，帰宅困難な来館者及び職員への対応として，非常食・飲料水等の備蓄品対応を検討している。 ○　大規模災害時に博物館を初動活動の拠点とした他所属との調整を行った。 ○　仙台保健福祉事務所との協定に基づいた，大規模災害発生時の初動活動を行うための執務室と物品管理場所の選定を進めている。 ○　関係地区消防本部との協定に向けた検討を進めている。	3
R1 ○	○　災害応急マニュアルを見直し，半数勤務時の体制整備を図った。また，実地訓練の実施により各担当者の業務内容などを確認した。 ○　仙台保健福祉事務所との協定に基づく同事務所の依頼を受け，大規模災害時に対する備品等を受け入れ保管した。 ○　塩釜地区消防事務組と大規模災害時における当館管理地の使用に関する覚書を締結し，大型バス駐車場を進出拠点等として提供することとした。	3
R2 ○	○　災害応急対策マニュアルに基づき総合防災訓練を実施した。 ○　仙台保健福祉事務所との大規模災害時における施設提供についての協定に基づく，受入日品等の状況について確認した。また，施設貸し出し時についての打ち合わせを行った。 ○　館内で非常災害時に必要となる備品等について見直しを行い，備品等の購入計画を作成した。	3
R3 ○	○　災害応急対策マニュアルに基づき総合防災訓練を実施。 ○　仙台保健福祉事務所との大規模災害時における施設提供についての協定に基づく受け入れ備品の状況について確認。施設貸し出し時についての打ち合わせを行った。	3
R4	○　「危機管理マニュアル」について，内容更新と新たに「加除式ファイル版」として全職員に配布した。 ○　仙台保健福祉事務所との大規模災害時における施設提供についての協定に基づく受け入れ備品の状況について確認。施設貸し出し時についての打ち合わせを行った。 ○　新型コロナウィルス感染症対策として，サーマルカメラ，消毒液等の設置や，不特定多数が触れる場所の定期的な消毒作業等を行った。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　引き続き，人命と貴重な文化財を守るため，確実な避難，パニックの抑制，適切な防災設備の操作方法など，主体性を持って行動できる職員意識を醸成する必要がある。	3.0

８　組織・人員

【活動方針】　(1)　組織の効果的，効率的な事業運営が確保される体制を構築します。

【達成目標】　㉗　部班の所管を検証し，必要な見直し行います。

【担当：管理部管理班】
○　本中長期目標の達成を目指した，組織運営に務めた。

年度	実　　績	評価
H30	○　部班の所管を踏まえた上で，組織運営上の課題や専門分野ごとの職員構成を考慮しながら適正な人事配置に努めている。	3
R1	○　部班の所管を踏まえた上で，組織運営上の課題や専門分野ごとの職員構成を考慮しながら適正な人事配置に努めている。	3
R2	○　部班の所管を検証し，適正な人数配置を行った。	3
R3	○　部班の所管を検証し，適正な人数配置を行った。	3
R4	○　部班の所管を検証し，適正な人数配置を行った。 ○　災害対応時の体制について，機動的に行動できるよう，部班員の割当を改善した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　博物館だけで解決できる目標ではないが，各年度評価は何れも「３」と評価した。 ○　職員配置については，組織定数・人事管理と密接なことから，今後も各部の所管業務を検証し，人事担当課と協議していく必要がある。 ○　組織のパフォーマンスを発揮できるよう，将来を見据えた人財育成マネジメントに努める必要がある。	3.0

【達成目標】　㉘　効率的な業務運営が確保されるよう部班間の協力体制の調整を行います。

【担当：管理部管理班】
○　部班間の協力体制のもと，効率的な業務運営に務めた。

年度	実　　績	評価
H30	○　各事務事業の実施時期・内容等についての共通理解を図り，円滑で迅速な事業運営が行えるよう部班間の連携に努めた。 ○　展示や催事等において，来館者の観覧状況を適切に把握し，案内業務や駐車場整理誘導業務など状況に応じ，部班間で弾力的な要員配置を行った。	3
R1	○　行事の時期・内容を早期に把握し，不明な点に関しては事業担当者に確認をとりながら円滑な運営に努めた。 ○　イベント等で来館者が多い場合は，館全体として来館者への案内業務や駐車場整理にあたるよう協力体制の調整を図った。	3
R2	○　各事業について，事業内容を把握し事前の情報提供や現状報告など連絡調整を行うことで，効率的な事業運営が行われるように努めた。 ○　行事については，必要人数に応じ，部班をまたいだ協力体制となるよう調整を行った。	3
R3	○　各事業について，事業内容把握し，事前の情報提供や現状報告など連絡調整行うことで，効率的な事業運営が行われるように努めた。 ○　特別展及び行事については，必要人員数に応じ，部班を超えて協力体制が.とれるよう調整を行った。	3
R4	○　各事業について情報共有を図ることで，効率的な事業運営に努めるとともに，ハード・ソフト的に横断的な課題について，部班間で課題の共有を図り解決に向けて取り組んだ。 ○　特別展及び行事については，必要人員数に応じ，部班を超えて協力体制が.とれるよう調整を行った。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　定数上，必要人数に応じた職員配置は難しいが，密接な連携と情報共有により，部班間を越えた協力体制の調整に努めること。	3.0

９　東日本大震災

【活動方針】　(1)　震災復興に貢献する博物館活動を積極的に展開します。なかでも県内の被災文化財の保全活動をリードし，活動全体を推進します。

【達成目標】　㉙　県立博物館として，県内の文化財の保存活動をリードし，活動全体を推進します。併せて被災文化財の修復や保存に関わる技術的な研究も進めます。

【担当：学芸部学芸班】
○　県立博物館として役割を自覚しながら，東日本大震災対応及びその後の諸活動をリードし推進した。
○　被災資料の修復など東日本大震災対応が一段落した現在においては，震災以後の各種災害への対応に軸足が移りつつあり，これら事業も適切に推進されている。
○　災害で得られた貴重な教訓を今後どのように活かすべきか，その議論が深まりつつある。

年度	実　　績	評価
H30	○　県立の博物館として，平成28年度末に解散した「宮城県被災文化財等保全連絡会議」の元代表幹事・事務局館として，県内市町村が直面する保全活動を主導し推進した。南三陸町や石巻市ほかの被災文化財について，「被災ミュージアム再興事業国庫補助金」を獲得し，クリーニング及び安定化処置など，保管施設について環境調査，管理支援及び資料の活用支援などを，そえぞれ継続して実施した。特に，山元町合戦原遺跡の線刻壁画資料について，一連の補助処理，安定化から公開に至る全ての過程で技術支援と活用支援を推進した。また，今後の保全全般活動のあり方，情報共有及び支援体制についても検討を進めた。 ○　震災復興発掘調査について，本年ども引き続き文化財課へ職員1名を派遣するとともに，調査による出土資料の保存処置を実施し，事業推進及び震災復興に協力を行った。 ○　被災文化財の修復や保存について，2件の科学研究費（基盤C「文化財収蔵のための緊急時における非文財収蔵施設の活用調査と低コスト運営法の開発」及び基盤研究C「被災物の活用のための劣化特性と保存法の解明」）を活用し，津波被害という未曾有の事例に対応する技術研究を進めた。	4
R1	○　県立の博物館として，平成28年度末に解散した「宮城県被災文化財等保全連絡会議」の元代表幹事・事務局館として，県内市町村が直面する保全活動を主導し推進した。南三陸町や石巻市ほかの被災文化財について，「被災ミュージアム再興事業国庫補助金」を獲得し，クリーニング及び安定化処置など，保管施設について環境調査，管理支援及び資料の活用支援などを，そえぞれ継続して実施した。また，今後の保存活動のあり方，情報共有及び支援体制についても検討を進めた。さらに，令和元年台風19号で被害を受けた博物館施設「まるもりふるさと館」の公開資料及び収蔵資料，施設の応急処置及び施設修繕の助言等を文化財課の依頼に基づき行った。また，同台風の被害概要について県内博物館施設あての聞き取り調査を日本博物館協会の依頼に基づき行った。 ○　震災復興発掘調査について，本年度も引き続き文化財課へ職員1名を派遣し，事業推進及び震災復興に協力を行った。 ○　被災文化財の修復や保存について，1件の科学研究費（基盤C「被災物の活用のための劣化特性と保存法の解明」）を活用し，津波被害という未曾有の事例に対応する技術研究を進めた。	3
R2	○　県立の博物館として，県内市町村が直面する保全活動を共働して推進した。。特に亘理町所在資料について，「被災ミュージアム再興事業国庫補助金」を獲得し，被災文化財についてクリーニング及び安定化処置などを継続して実施した。この他にも，石巻市，大崎市及び南三陸町などの保存施設について環境調査，管理支援及び資料の活用支援なども継続して実施した。また，今後の保存活動のあり方，情報共有及び支援体制についても検討を進めた。 ○　震災復興発掘調査について，本年度も引き続き文化財課へ職員1名を派遣し，事業推進及び震災復興に協力を行った。 ○　被災文化財の修復や保存について，1件の科学研究費（基盤C「被災物の活用のための劣化特性と保存法の解明」）を活用し，津波被害という未曾有の事例に対応する技術研究を進めた。	3
R3	○　東日本大震災後の災害を含め，他機関と連携・協働し，被災資料の保全・修理活動を推進した。今年度は，８月に石巻市の被災資料収蔵施設の保存環境構築にかかる技術支援及び指導を行った。併せて，被災閉館した旧石巻文化センターを継承する石巻市博物館の開館に向けて，保存環境構築にかかる技術支援及び指導を行った。また，文化財課と連携し，近年の地震により被災した民俗資料１点と建造物１棟の処置・修理について専門的助言を行った。	3
R4	○　今年度は大きな災害に襲われなかったことから，対応実績はない。しかし，いつ襲うとも分からない次なる災害に備えて，これまでの実績をあらためて振り返り，今後の災害対応マニュアルの策定に向けた準備を鋭意進めた。また，東日本大震災で被災した具足など個人所蔵資料の経過観察を継続するとともに，東日本大震災の津波に被災した紺紙金字写経の経過観察が満了し所蔵者あて無事の返還が実現した。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は「３～４」，５カ年平均「3.2」であり，当館が果たすべき役割をよく理解し，本事業は概ね順調に進行した。 ○　常に多種多様な災害の危機があることを念頭に置き，今後も県立博物館として果たすべき役割を追究し，その任を全うする必要がある。	3.2

【達成目標】　㉚　災害と復興の歴史及び災害に関する資料の調査・研究を推進します。

【担当：学芸部学芸班】
○　県立博物館として役割を自覚しながら，東日本大震災対応で得られた貴重な教訓と知見に基づき調査・研究を行った。
○　これら研究成果をもとに新たな手法等を開発し，今後予想される災害時の被災資料の修復や収蔵方法を構築しつつある。

年度	実　　績	評価
H30 ◎ ○	○　平成26年度から研究分野横断型の「歴史的災害展示研究」プロジェクトを推進し，さらに２０１７年度からの3ヶ年度にわたり科学研究費（基盤C「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」）を獲得したことにより，東日本大震災の経験に立脚しながら，歴史的に繰り返されてきた災害の実態を研究している。現在，「雲仙岳災害記念館」の展示内容及び手法の調査を行うなど資料調査を重ねるとともに，研究会を2回開催している。調査と研究会については，年度末に向けて，さらなる上積みを図り，研究を推進する予定である。	3
R1 ◎	○　平成26年度から研究分野横断型の「歴史的災害展示研究」プロジェクトを推進し，さらに平成29年度からの3ヶ年度にわたり科学研究費（基盤C「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」）を獲得したことにより，東日本大震災の経験に立脚しながら，歴史的に繰り返されてきた災害の実態を研究した。具体の活動内容として，山形県酒田市飛島の現地調査を2回行うなど資料調査を重ねるとともに，研究会を3回開催した。	3
R2 ◎	○　科学研究費（基盤C「被災物の活用のための劣化特性と保存法の解明」）を活用し，被災資料について，被災痕跡を残したまま調査研究・公開などに長期間安定的に利用する手法の開発を進めている。科学研究費は本年度が最終年度であり，年度末を目途にその成果を公開するとともに，今後の展望などを総括する予定である。	3
R3 ◎	○　災害の歴史及び災害に関わる資料について調査研究を行うとともに，次年度以降に本格実施を計画している，非常時を意識した低エネルギー低コスト収蔵手法の構築に関する研究の事前準備を進めた。	3
R4 ◎	○　非常時を意識した低エネルギー低コスト収蔵手法の構築に関する研究を鋭意進めた。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，当館が果たすべき役割をよく理解し，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　常に多種多様な災害の危機があることを念頭に置き，今後も県立博物館として果たすべき役割を追究し，その任を全うする必要がある。	3.0

【達成目標】　㉛　復興祈念事業を展開し，震災から立ち上がろうとする県民の活力増進の一助とします。また，防災教育の拠点として災害展示の公開を目指した整備を進めます。

【担当：学芸部学芸班，企画部企画班】
○　復興記念事業として「東大寺と東北ー復興を支えた人々の祈りー」，「みやぎの復興と発掘調査」を実施，R5に開催予定特別展「悠久の絆」に係る準備を行った。
○　災害で得られた貴重な教訓として「未来へのきずなー防災を学ぼうー」及び「コロリン・タネノスケと学ぼう！東北の災害の歴史」の2つのプログラムを開発し「こども歴史館」で防災教育を行っている。

年度	実　　績	評価
H30 ◎	○　東大寺の復興の歴史が，東北復興の“今”と“未来”を照らす道灯りとなり，大人はもとより，何より子ども達が夢と希望と誇りを持つことのできる豊かな東北を築くことを願って，東日本大震災復興祈念特別展「東大寺と東北ー復興を支えた人々の祈りー」を開催した。また，会期中に募金箱を設置し，多くの観覧者から募金をいただき，この募金については実行委員会として「東日本大震災みやぎこども育英募金」に寄付した。 ○　復興祈念事業として，2020年度春に特別展「復興発掘調査のあゆみ（仮題）」の開催を予定しており，現在，開催に向けて準備を進めている。展示では，東日本大震災の被災状況から復興までのあゆみをパネルで紹介するほか，地域の宝である遺跡からの出土品を公開する予定である。併せて，シンポジウムを開催し，早期復興への取り組み等も紹介する予定である。この事業により，地域の歴史を振り返り，地域に対する誇りを体感することで，県民の一層の活力増進を図るものである。 ○　防災教育の拠点として災害展示の公開を目指した整備を進めるため，２０１４年度から研究分野横断型の「歴史的災害展示研究」プロジェクトを推進し，さらに２０１７年度からの3ヶ年度にわたり科学研究費（基盤Ｃ「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」）を獲得したことにより，東日本大震災の経験に立脚しながら，歴史的に繰り返されてきた災害の実態を研究している。現在，「雲仙岳災害記念館」の展示内容及び手法の調査を行うなど資料調査を重ねるとともに，研究会を2回開催している。調査と研究会については，年度末に向けて，さらなる上積みを図り，研究を推進する予定である。	3
R1 ◎	○　復興祈念事業として，令和2年度に特別展「みやぎの復興と発掘調査」の開催を予定しており，現在，開催に向けて準備を進めた。展示では，東日本大震災の被災状況から復興までのあゆみをパネルで紹介するほか，地域の宝である遺跡からの出土品を公開する予定である。併せて，シンポジウム1回を開催し，早期復興への取り組み等も紹介する予定である。この事業により，地域の歴史を振り返り，地域に対する誇りを体感することで，県民の活力増進への寄与を図ることとしている。 ○　防災教育の拠点として，当館は「こども歴史館」のシアターにおいて「未来へのきずなー防災を学ぼうー」及び「コロリン・タネノスケと学ぼう！東北の災害の歴史」の2プログラムを公開し，県民全体はもとより，東日本大震災を経験していない児童生徒に対して防災の重要性を伝える役割を果たした。さらに，災害展示の公開を目指した整備を進めるため，平成26年度から研究分野横断型の「歴史的災害展示研究」プロジェクトを推進し，さらに平成29年度からの3ヶ年度にわたり科学研究費（基盤Ｃ「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」）を獲得したことにより，東日本大震災の経験に立脚しながら，歴史的に繰り返されてきた災害の実態を研究した。具体的には，山形県酒田市飛島の現地調査を2回行い，研究会を3回開催した。研究会は，総括として，館職員を対象とした「試行展示」を実施して議論を深めた。	3
R2 ◎	○　復興祈念事業として開催された特別展「みやぎの復興と発掘調査」について，展示構成などの基盤となる調査研究を円滑に推進した。新型コロナウイルス感染症対策としてアンケートは実施しなかったが，解説員の報告によれば比較的地味な展示ではあるものの肯定的な意見が多く寄せられたとのことから，展示の基盤となる調査研究の成果が受け入れられたものとみられる。これにより，地域の歴史を振り返り，地域に対する誇りを体感させること，県民の活力増進に寄与することなどが達成されたと評価される。 ○　防災教育の拠点として，当館は「こども歴史館」のシアターにおいて「未来へのきずなー防災を学ぼうー」及び「コロリン・タネノスケと学ぼう！東北の災害の歴史」の2プログラムを公開し，県民全体はもとより，東日本大震災を経験していない児童生徒に対して防災の重要性を伝える役割を果たし好評を得ているところである。調査研究はこれらプログラムの正確性及び客観性を担保する役割を果たしていると言える。	3
R3 ◎	○　令和５年度特別展「悠久の絆」（予定）を始め復興祈念事業にかかる調査研究事業を進めるとともに，ＩＣＯＭ-ＤＲＭＣ国際博物館会議博物館防災国際委員会関連シンポジウム「博物館・文化財等の被災と再生をテーマとした討議」及び国立文化財機構主催「水損紙資料に関する勉強会／意見交換会」に職員を派遣し，災害にまつわる博物館，博物館資料及び文化財等の情報を収集・蓄積した。	3
R4 ◎	○　令和5年度特別展「悠久の絆」（予定）を始め復興祈念事業にかかる調査研究事業を鋭意推進した。 ○　東日本大震災への対応が一段落し，新たな災害への対応に向けた端境期にあるなか，これまでの経験及び情報の蓄積の整理を進た。	3
後期総括	【推進委員会意見】 ○　各年度評価は何れも「３」であり，当館が果たすべき役割をよく理解し，ほぼ計画どおりに目標が達成されている。 ○　各種の復興祈念事業の実施により，震災から立ち上がろうとする県民に喜びや感動などを提供することができたと評価する。 ○　常に多種多様な災害の危機があることを念頭に置き，今後も県立博物館として果たすべき役割を追究し，その任を全うする必要がある。	3.0